

集合ライフコースの手法による自伝の試み

森 岡 清 美

I 集合ライフコースとは

まず集合ライフコース collective life course の概念をコンボイ convoy との比較のもとに定義しておく。コンボイとは、*The Random House Dictionary of the English Language* によれば、①護衛船、②護衛船に付き添われた船あるいは船団、③同一命令のもとに移動する軍用車輛の集団、である。こうした原義をふまえつつ、護衛するものとされるものとの区別（①と②）をやめ、地上の空間移動から人生の時間移動に視点をずらし、集団（③）から個人を中心とするネットワークへと軸足を移して、コンボイを人生の同行ネットワークと捉え直すとともに、原義との差異を鮮明にするために集合ライフコースという新しい概念を設定したい。この概念によって、暫時の同行を含むコンボイよりも長い、何年間かにわたる同行、そして同行集団（青井1985: 118-120）というより個人の同行ネットワークであることを、含意させることができるだろう。しかし、青井和夫がコンボイに認めた属性、すなわち絆はパーソナルかつ多面的多義的であり、互いにパースンとして啓発しあうことは（同上: 118）、集合ライフコースをも特徴づけるところである。

集合ライフコースにはさまざまなものがある。生活の集合ライフコースは家族であり、生育の集合ライフコースは兄弟姉妹である。活動の集合ライフコースには職場の同僚のほか、研究仲間のような任意のネットワークもある。ここで取り上げようとする同級生は学習の集合ライフコースである。集合ライフコース形成の背後には、学校、教会、病院、企業、官庁、軍隊など制度的組織が外枠として存在することが多いが、相互啓発や互助のような機能をもつ場合は形成に任意性が加わる。また、現在活動中の集合ライフコースのほかに、活動が潜在あるいは休止しているものもあることに注意したい。同級生は学習の集合ライフコースを形成するが、学習修了の後は活動を全く止める場合もあり、同窓会の形で親睦の集合ライフコースとして存続することもある。同級生の集合ライフコースとしての活動は過去のことで、現在は休止あるいは解消状態のものも少なくないことに留意しつつ、本稿では同級生を取り上げる。

同級生という集合ネットワークの特色は、少年期から青年期にかけての学習活動を長期間ともにしたことに加えて、その制度的枠組のために同齡であることである。小学校では厳密に同齡であり、上級学校にゆくに従って同齡性に緩みが出てくるが、同一教会の長期会員、ハンセン病の同一療養所入所者などに比べるまでもなく、同齡性がきわめて高い。そのため時代環境の影響を同年齡で浴びることとなり、時代影響の世代的ヴァリエーションを探るには好適の観察対象ということが出来る

そうなると、同齡集団 cohort との関連が問われるであろう。コーホートとは出生年を同じうする人口集団のことである [森岡1988: 305]。同期生は同年入学集団あるいは同年卒業集団としてコーホートの一種であることはいうまでもないが、人口集団であるに止まらず、制度的組織の外枠のために、実際に集団をなすかなしたことがあり、かつ比較的濃密に繋がったネットワークで裏うちされているところに、並のコーホートにない特色がある。本稿ではその側面を強調したいので、コーホートではなく、集合ライフコースの語を採用する。なお、特定の集合ライフコースの特色は、その集合ライフコースが含まれるコーホート内偏差と理解されよう [同上: 308]。

かつて宮本常一が渋沢敬三 (1896-1963) の友人関係に注目して、「よい友、よい知己をもったということ、渋沢の活動の幅もひろがっていったのだが、それは同時に渋沢の人間の幅をひろげていったと思う。しかも、よい友の多くは大学卒業までの間に得て、そのいずれの人々とも生涯のつきあいになっていった」 [宮本2008:118] と述べているように、学校時代にえた友人との関係が、その後の活動の場を拡げるばかりでなく、人間の幅をも拡げることがある。こうした人間発達のうえで小さくない意義をもつ学友を、とくに同級生について考察しようとするものである。宮本は渋沢の第二高等学校時代にえた生涯の友として土屋喬雄 (1896-1988) と有賀喜左衛門 (1897-1979) を挙げているが、ともに1915年入学の同期生であった (渋沢と土屋は文科英法科、有賀は文科独法科) [同上: 117-118]。

さて、学習の集合ライフコースを考察するには、当該集合ライフコースの内側を観察する前に、彼らが同級生という集団をなした時期の学校環境の点検が必要である。学校環境によって受けた刻印を集合ライフコースとして多かれ少なかれ担いつづけるからである。

そのような調査の前例は、朝日新聞の週間誌 *Aera* が2003年5月19日号で発表した「東大法学部卒業10年調査」ぐらいのものではないだろうか。ここでは学校環境の記述は読者にとってほとんど必要がないと見込んで省略されている。それはさておき、20年、30年ともし調査が反復されればきわめて興味深い成果が提供されると思われるが、10年調査ですら、1993年東大法学部卒業生の現在の連絡先を可能な限り割り出し、アンケートをして回答を得たのが48人という。したがって、本格的な調査機関が着手するのではないが、20年調査以降はほとんど事例調査的なものになり、それはそれとして有益であるが、漠とした傾向しか掴め

ないことだろう。

本稿で同級生を組上に載せるのは、本格的に実施した前例がないに等しい研究の露払いとなるためでなく、集合ライフコースの手法で伝記を書くことを試みるためである。集合ライフコースの中心に立つego, この場合伝記の主人公が高学歴者の場合、小学校の同級生から出発して、上級学校への進学に伴う同級生の段階的積み上げを逐い、egoの成熟過程に注目しつつ生活空間の拡大と職業的地位の移動を追跡しなければならない。

伝記を書く試みを私の自伝について実施する。それは短期間に資料を取得しやすいからであるが、また試みの作業に他者を利用することを避けて、「随より始めよ」との古諺に従う思いからでもある。私は三重県の山村で高等科2年まで8年間小学校教育を受け、ついで津市にあった三重県師範学校本科第1部という5年の課程を卒業し、さらに東京高等師範学校文科第1部を2年で修了した。直ちに東京文理科大学へ入ったが、敗戦直後の混乱の3年間で、大学の同級生というに足るネットワークの形成に至らなかったから、考察は東京高師で打ちどめとする。

これは1930年から45年に至る15年間であり、まさに「15年戦争」の期間と重なる。満洲への軍事的侵攻に始まって泥沼化する長期戦のために、国力を総動員した戦時下の軍国主義的・超国家主義的体制が、この時代に児童生徒として成長した若者にどのような刻印を残したか。また、小学校-中学校-高等学校-大学という本流でなく、高等小学校からその教師になる師範学校へ進み、さらにその教員を養成する高等師範学校に学ぶという傍係出身者、一筋に流れる大河ではなく、段階毎に閘門で閉じられた運河を航行するような教員養成系の学校を経た者たちが、どのように特殊な刻印を帯びて成人したかが、問われなければならない。

以上の作業のために、まず経験した学校環境を時代的社会的背景のもとに概観し、ついで同級生という制度的枠組に包摂される集団像を、今日まで交流を継続している意義ある同級生の情報を点綴させつつ論じることにはしたい。そのなかで、私の自伝的語りも浮き彫りになっていけば幸いである。

II 小学校の同級生

1. 阿波小学校

私の出身地は、淀川の一上流服部川の水源をなす布引山脈西麓にある小盆地、米作・養蚕・林業が主な産業の阿波村（現・伊賀市の東部）という、人口2,100人ほど（1935年）、戸数500戸足らずの村である。1889年の町村制により4旧村が合併して成立した翌年、従来からあった小学校が阿波尋常小学校と改称し、1898年高等科を併置して阿波尋常高等小学校となった。校舎は村の地理的中心というより人口の重心に近い位置に建設され、村の西端の私の地区から3キロほどあった。子どもたちは東に向かってやや上り坂になる県道を徒歩で通

学したのである。私が在校したのは、1930年から1938年までで、男女共学の尋常科6年6クラス、高等科2年2クラス、全校児童は400人近く、1学級平均48人ほどであった。尋常科で私の属したクラスは男児31人、女児18人の49人、女児数が目立って少なく、1級下も同様であったが、他は男女ほぼ均衡していた。稀に落第して加わる者あるいは脱落する者、村の東端、長野峠の隧道工事人夫集落から通う朝鮮人子弟もごく少数いたが、クラスの児童数にはほとんど変化がなかった。落第生以外は残らず同齡であったことはいうまでもない。

8年間の担任は5人、全員阿波村出身で、滋賀師範卒の1人を除いて、三重師範の本科第1部か第2部を卒業、あるいは専攻科を修了した人、校長もしかり。校長を除いて20歳台後半から30歳台前半の若い、他校勤務の経験の乏しい先生たちであった。校長を含めて6人中5人まで比較的富裕な農家の次男で、他家へ養子に行ったり、実兄の養子になったり、分家した人たちであった。残る1人は宿屋の長男、これが滋賀師範卒である。教員は校長以外に10人（うち女教員3人）。担任でない教員が2人いたことになるが、1人は実業補習学校女子部係、もう1人は補助的役割の代用教員であったのだろう。

校舎は東西に長い平屋一棟の中に8教室と理科室・教員室および屋内体操場を擁し、曲屋風に西から南に連なった棟は実業補習学校女子部用の裁縫室が占め、本屋の西に隣接して唱歌室だけの小さい平屋があった。本屋の南前面には東西約150米、南北約100米の運動場が広がり、その南端には背の高いポプラと桐の木が並び、登攀運動用の丈余の木製器具と体操用の鉄棒が設置されていた。

村内が自治と行政という表裏する目的のために7地区に分けられていたが、地区ごとに児童たちは決められた待ち合わせ場所で勢揃いし、リーダー役の高等科2年の児童が全員集まったのを確認したうえで、尋常科1年生を先頭に学年順に縦一列になって集団登校した。その点では学校所在地区の児童も同様であった。学校に着くと、始業時刻までの間、地区ごとにただし男女別に集団的な遊びを楽しんだ。男子の間で人気のあったのは「軍艦戦艦」という遊びで、広い運動場を縦横に駆け廻った。雨天の日には屋内体操場で遊んだ。とくに好まれたのは「座り相撲」である。立ってではなく、マットのうえに膝をついて取り組むところから、その名があったのであろう。屋外であれ屋内であれ、集団的な遊びを学年ごとにしなかったのは、集団登校の着校時刻が地区によって違ったため、また、地区ごとの集団的な遊びも始業前だけであったのは、終業時刻が学年によって違ったためである。放課後も学年ごとに集団的な遊びをせず、掃除などが終わりしだい下校するよう指導された。

教科は、1年で終身、国語（読方・書方）、算術、図画、唱歌、体操、手工の7教科、2年で国語に綴方が加わり、4年で理科、5年で国史、地理、男子には高等科1年でさらに農業が加わって11教科となる。女子では農業の代わりに裁縫・家事が追加された。農業は農山村男子に課されるが、町場では商業あるいは工業がこれに代わり、実業という教科に一括さ

れるものであった。評価表には教科の下に操行という欄があって、担任教師の所見が記入された。評点は甲乙丙の3ランクであるが、甲下といった中間的判定も用いられた。一般の教科には国定教科書が判定の基準となったのであろうが、判定基準を欠く操行の場合、丙というのはどういう場合に用いられたのであろうか。

全評価は担任により『生徒手簿』に記載されて保護者へ報告されるほか、卒業式には学年ごとに学業成績によって一等、二等、三等、各2～3人ずつ賞状と書籍や学用品の副賞を与えられ、全校教員・児童、来賓の前で表彰された。そのさい、皆出席者は褒状を受け、1年間の皆出席のほか、尋常科6年間皆出席者、尋常科高等科8年間皆出席者も表彰される。阿波小学校では、郡視学や女学校長を勤めた初代校長の寄付による谷口奨学資金の特別賞があり、各学年の首席がそれを授与された。また、1学期末に行われた試験の採点結果が教科ごとに1冊に綴じられ、試験が行われた全教科の成績物が一括して木箱に納められて、夏休みに村の東から西へと児童の家庭を順繰りに送られるのが定例となっていた。クラス全員の主要な成績物が保護者と児童の間に一覧に供されるのであるから、成績のよい子とその親にとっては誇らしいことであるが、成績の芳しくない児童と彼らの親は面目丸つぶれとなる定例行事であった。総じて、公表することによって競争心が刺激され、その結果、児童の勉学意欲、親の勉学させる意欲が高まり学校の教育成果が向上するという、教育観が窺われる。

4月上旬の始業式には3学年以上に級長が任命された。任命基準は学業成績であったようで、選挙による児童の自主的選定ということは、考えられもしなかった。級長の役割は担任教員の指示のもとに担任とクラスと間の連絡係を勤め、授業の開始と終了のさい起立、礼の号令をかけることに尽きた。クラスの意見をまとめるなどの実質的な役割は期待されていなかったし、そういう訓練もなかった。

4月には天長節、11月には明治節、元日には四方拝、2月には紀元節の式典が執行された。全校児童が屋内体操場に整列させられ、校地の一角の奉安殿から体操場正面の壇上に奉遷された天皇皇后の「御真影」にたいして、来賓参列のもとに儀式が行われ、必ず教育勅語が奉読された。勅語奉読の間、児童は頭を下げて拝聴する姿勢をとるのだが、当時は粘液質の鼻水を垂れている子どもが多く、頭を下げつづけると鼻水の始末に困る。そこで奉読が始まる前に一斉に鼻水をすすり、終わると再び鼻水をすする音が波のように広がった。式典はその日に因んだ校長訓話で終わる。この学校神事の本尊は「御真影」、経典は教育勅語、祭司は校長、説教は校長訓話、それに讚美歌に擬しうる祝祭唱歌も備わっていた。児童は祝いのオシモン（型で押し固めて作ったピンク色円形餡入りの菓子）を1箇所ずつ与えられて、昼前に地区ごとに集団下校した。児童はこうした儀式のさいのふさわしい振舞方いわば外形をほぼ身につけたが、儀式で染めようとしたであろう天皇教の国体観念に内面まで染まったかどうかは疑わしい。それでも、天皇教だけが注入される効果は軽視できないのではないだろうか。

その他の祝祭日には学校で訓話があった後神社に参拝するか、休日となった。『生徒手簿』の「児童学歴」によればつぎのとおりである。

4月3日 神武天皇祭

第一代神武天皇ノオ祭日デ学校ハヤスミデアル。

9月23～24日 秋季皇霊祭

学校デ訓話後神社ニ参拝シ戦死軍人ノ墓参リヲスル、宮中ノ皇霊殿デ祖宗ノ御神霊ヲ祭ラル、日デ、春秋二回アリマス。

誰デモ先祖ノオ祭日ニハ、オ墓参リヲスルノデス、オ墓ハイツデモキレイニ掃除シテ、時々新シキ香花ヲ立テルノデス。

10月17日 神嘗祭

本年ノ新穀ヲ皇太神宮ニ饌ヘ奉ル日デ、学校ハ休業。

11月23日 新嘗祭

天皇陛下ガ、ミズカラ新穀ヲ饌ヘテ皇祖皇宗ヲ祭ラレ、及御膳ニ上セラル、ノデアル、神社ニ参拝ス。

12月24日 大正天皇祭

今上天皇陛下ノ父君ノ崩御サレタ日デ学校ハヤスミデアル。

3月21～22日 春期皇霊祭

秋季皇霊祭ニ同ジ。

神社参拝が国家の祝日との関連より、春秋の皇霊祭、新嘗祭という宮中祭儀との関連で説明されているのが注目されよう。

学校行事としては、10月中旬に運動会が、3月中旬に屋内体操場で学芸会が開かれた。いずれの出し物も学年単位で上演され、地区単位の出し物はなかった。学校行事以外では上記のように地区単位の活動が重要な役割を演ずる場面もあったが、学校行事となればもっぱら学年単位で担任教員の指導のもとに計画実施されたのである。

この外11月上旬には西に隣接する布引・山田・壬生野の3カ村3校との連合運動会が、集合に便利な山田小学校で毎年開かれた。また、このグループで連合学芸会が開かれたこともある。連合運動会について『生徒手簿』の「児童学歴」に、

フダンヨリヨクカラダヲネッテ置イテ、立派ナハタラキブリヲセネバナラス。

コノ時ハ各小学校生徒ハイフマデモナク、沢山ノ人ガ集ッテ来ルノデスカラ、本校生徒トシテノ体面ヲケガスヤウナフルマヒノ、ナイヤウニセネバナラス。

とあるように、学校側の指導は、見事な演技をし他校との競技により成績を挙げることに、つまり称讃されるような活躍をすることと、自校の体面を汚すような見苦しい振舞をしないことに重点があり、他校の児童から学ぶもののあることに注意を促すものではない。折角

の村を超えた接触の機会も、年1～2回に限られたうえに、指導する側の関心が内向きであるため、児童の生活空間を拡げうるものではなかった。

春秋2季に遠足が学年単位で行われたが、もっぱら徒歩であったから、村外に出たとしても近村に限られ、児童の見聞を広めるには足りなかった。その目的にもっとも添った学校行事は5月中旬の修学旅行であって、尋常科6年生は伊勢参宮を目的として宇治山田地方（現・伊勢市と鳥羽市）へ、高等科2年生は都市見学を目的に京阪地方へ旅行した。海を見たことも海水に手を浸したこともない山村の児童が、二見浦で小船に乗せてもらって海水が塩からいことを初めて経験し、伊賀の城下町上野町しか知らない子どもが大阪で初めてネオンサインを見て肝をつぶした。修学旅行で初めて汽車に乗った者もいるなど、山で囲まれた狭い天地をわが宇宙として育ててきた学童たちは数々の初体験をした。

『生徒手簿』の「児童学歴」は山村の子どもたちの生活世界を窺わせる記述に満ちている。高等科男子の教科に農業が加わることは先にふれたが、田植えの季節に農繁休業が1週間ほどある。家での養蚕・米作の手伝いは実習と位置づけられ、関連する作業にも積極的に参加することが求められる。このように高等科はいわば在宅農学校の性格を兼ねたのである。かくて、仕事と同様に学業にも勤勉であることが要請され、さらに儉約し貯蓄することが勧められ、勤儉貯蓄が子どもの成熟目標として示されている。関連する事項を摘記しよう。

4月下旬 農作物病菌害虫駆除

コノ月ノシマイ頃カラ、田畑ニ作ッテアル農作物ノ病菌ヤ害虫ヲトレ、ソシテソノ数ヲ学校ニ届ケ出ヨ、ソノ病菌ヤ害虫ハ桑ノ毛虫、尺トリ虫、天牛（かみきりむし）、クロホ、タネノウマナトデアル。

5月中旬 蚕ガ孵化シハジム、桑ツミ、シタガエ（食滓やフンの除去）、ソノ他ノ手伝ヲナセ。

6月上旬 1. 螟虫（稲の害虫）卵塊ヲ採取セヨ、採取シタ数ハ現物ト一緒ニ学校ヘ届ケヨ、本田ニツキ採取スルトキ、アゼモノヲフミ、或ハ、苗ヲタフシテハナラス。

2. 六七日頃ヨリ農繁休業アリ

下級ノモノハ平日通り授業ハアレド、上級ノモノハ其ノ間家ニアリテ農事ノ実習ヲナス、ツトメテ外ニ出デテ立チハタラケ、又、外ニ出ル要ナキモノハ、養蚕ノ実習、台所ノ仕事、子守、水汲ミ、ワラ仕事ナド、出来ルダケノコトヲセヨ。下級生デ、下校後、家ニアルトキハ、父母ニ手カズヲカケヌヤウニセヨ。

上級生ハ実習日誌ヲツケルコトヲ忘レルナ。

11月上旬 此頃ヨリ収穫ノ時期トナル、家事ノ手伝ヲ充分ニセネバナラス。

12月1日 本日ヨリ上草履ヲハクコトヲユルサル

五年生ニナツタラ、必ズ自分デ草履ノ作レルヤウニ、ケイコヲシテ置カネバナラス。

中旬 貯金調アリ

生徒ガドレダケノ貯金ヲシテ居ルカ調ベルノデスカラ、貯金ノ計金ヲ受持ノ先生ニ届ケヨ。

平生ワヅカノ錢デモ、無益ナ所ヘツカハズニ、タマッタダケヲドンドン預ケ入レルヤウニセヨ。

1月1日 親類や其他ノ人カラ、祝儀ヲモラッタラ、必ズ、貯金セヨ。

3月中旬 学芸会アリ

成績品ノ展覧会モ併セテ開ク。

日頃勤勉ノ結果ヲ多クノ人ノ耳ヤ目ニ入レルノdealカラ、何デモ皆ノ人ニ感心シテモラフヤウデ、ナケレバナラス。

また、阿波村内鎮座の神社2社（1社は郷社阿波神社、もう1社は村社葦神社）への代表参拝も学校行事の1環をなし、前出のように先祖の墓参りも勧められる。敬神崇祖の実践である。

4月25日 郷社祭

高等科生ハ全校児童ヲ代表シテ参拝ヲナス、他ハ平生通り授業。

スベテ神社ヤオ寺ヘ参ッタトキハ、必ズ、正面ニ立ッテ敬礼ヲナセ。建物ヲケガシタリ、境内ノ草木ヲ折ッタリ、其他、不敬ナコトノナイヤウニセネバナラス。又、オ参リシタトキニ、オ菓子ヤ其ホカ不用ナモノヲ買フノハヨロシクナイ。スベテ、フダンニデモ、ミダリニ錢ヲ持ッテ買物ヲスルノハヨクナイデス。

5月5日 村社祭

高等科生ハ全校代表トシテ参拝ス、他ノモノハ休業。

以上引用した『生徒手簿』は1930年7月尋常科1年の1学期末から1938年3月高等科2年卒業まで継続して使用された。冒頭の「我が校の歴史」には1929年までの記事が掲載されているから、入学時に最新の版が与えられたことが分かる。在学中に、校舎本屋の東部をなす特別教室(理科室, 工作室)と別棟の奉安殿落成(1931), 使丁室改築(1933), 運動場拡張(1934), 実業補習学校と青年訓練所を合併して阿波村立農業青年学校と改称(1935)など、施設整備と制度改正が進んだが、それ以上に大きな変化を示し続けたのは社会的政治的環境であった。

世界恐慌が日本に波及していわゆる昭和恐慌が始まり、とくに農産物価格の下落が顕著になったこと(1930), 満洲事変が勃発した年に農村不況が深刻化したこと(1931), 上海事変が勃発し満洲国が建国を宣言したこと(1932), 国際連盟からの脱退(1933), 2.26事件が起こり(1936), ついで日中戦争が始まり日本軍が侵攻して南京を占領したこと(1937)など、一連の重大事件のニュースは主に新聞紙により、また噂となって僻村にも伝わった。学童も入営兵士を送る行事を身近に見聞し、村で初めての満洲事変戦死者を讀える創作劇「あ、阿

波上等兵」が学芸会で上演された。2.26事件の時局講話が彼らに衝撃を与えないわけではなかったし、大人たちの行動から不況の深刻化がひしひしと感じられたものの、日本社会の政治的軍事的激動は幾重にも弱められた形でしか村には伝わらなかった。

人と物の広い交流が乏しい僻村の生態的要因に加えて、ラジオのあるのは小地主など富裕な少数の農家に限られるという情報伝達手段の未発達が、その背景にあったことは確かであるが、人々の志向が内向きであることが、もっとも大きい要因と思われる。それはすでに小学校教育に端的に現れている。小学校の指導が、学童は卒業後村で生活することを当然の前提としているとしか想定できないことは、前記の数々の例証で明らかであるが、なお一つ加える。

「児童学歴」8月1日の条、夏期休業の心得のなかに、「水ヲアビテハナラス」という1項がある。「水アビ」とは水浴のことでなく水泳であって、泳ぎうるところとしては村を貫流する服部川の淀みか地区々々の溜池しかないが、どこでも泳いではならぬ、というのである。いうまでもなく危険防止のためである。しかし、夏季の川は子どもにとって絶好の遊び場であるから、彼らは川遊びのついでについつい自己流の犬かき泳ぎをしてしまう。禁を犯して泳ぐことを「盗人（ぬすつと）浴び」と呼び、ぬすつと浴びをした子どもは秋学期の始めに摘発されて、廊下に相当時間立たされるというペナルティが科された。村に住めば泳ぐ必要はないが、他所に出れば泳ぎが必要な必須の生活技術となるかもしれない。家の跡取、跡取の嫁、跡取娘の婿、村内での分家あるいは独立、といった身の振り方ができた者は在村するが、そうしたことができない者は自らの運命を開拓するために離村しなければならない。私のクラスで云えば男子の4割強、女子の4割弱が他出している。それに、健康な男子はみな兵役に従わねばならぬ。こうした離村が避けられない者にとって、水泳ができぬことはマイナス点となる。彼らにセールスポイントを培って送り出さなければならないのに、逆方向の指導をしたのは村のリーダー層の志向が内向きであったからである。しかし、内向き志向は視野の狭さに因るとばかりはいえず、農村更正運動によって挙家離村をくい止めようとした時代環境のなかでは、在宅農学校の性格を抛り所に村を守るための背に腹は代えられぬ選択であったのかもしれない。

では、こうした環境のなかで育った子どもたちが、在村しつつどのように自らを開発していったのか。また離村した子どもたちは、どのような必要で他出し、どのようにして見知らぬ土地で自らの運命を開拓していったのか。私の同級生の例で語ることとしよう。

2. 1936年尋常科卒業の同級生

1930年阿波尋常高等小学校に入学した、1936年尋常科卒業時の同級生は男児31人女児18人。うち男児3人が県立上野中学校に進学したほかは高等科に進学したが、女子1人が死亡した

ため、38年高等科卒業は男子28人女子17人であった。このうち男子2人が進学した。他の男子は生家に留まって農作業をするなり、林業関係の日雇い労働に従事するほかは、仕事を求めて離村した。女子の多くは家事手伝いをしながら小学校付設の農業青年学校で裁縫を学んだ。女子で進学した者は皆無だった。

在村か離村するかを決める第一の要因は、男子では長男か次男以下（以下、次三男）であるか、女子では娘ばかりのなかの長女（跡取り娘）かそれ以外の娘であるか、という続柄属性である。男女ともに前者は家の跡継ぎとして家に留まるゆえに在村が必至となり、後者は家には留まれないが、村に留まる者と離村する者とに分かれる。

家相続かどうかが決定的に示されるのは結婚においてであるが、未婚で死亡する者もいる。私のクラスで該当する者が男5人、女1人あり、男子の未婚死亡（16%）はみな戦死か戦病死であるところに戦中世代の特色が示されている。以下、未婚死亡者は除く。

尋常科卒業時の男児26人のうち長男14人、次三男12人とほぼ半々で、長男のうち7人は家を継いで在村した。離村した長男7人のうち4人（下記のACDE）まで進学者、一旦他出しながら帰村した1人（B）を加えると長男の進学者は5人になる。上記のように尋常科卒で上野中学進学がABC 3人（Aはそれ以上進学せず、Bは高等工業学校、Cは中国の北京大学進学）、高等科卒で進学がDE 2人（Dは商業学校、Eは師範学校進学）である。CDEは弟などが代わって家を継いだので継承に問題なく他出し、帰村しなかった。Bは継承代替者を確保できず、高校教師退職後帰村した。Aは、戦後一旦帰村した後、全家離村した。他出した非進学の長男3人も全家離村組である。

次三男に進学者がいないのは、進学について長男と次三男とを差別する慣行があったからではない。前述のように、小学校時代のクラス担任と校長計6人のうち5人は次三男であったことがその1例証であろう。進学者は大体成績が優秀で、一等賞クラスかこれに準じる好成绩の者ばかりであったが、次三男にこれに該当する者がたまたまいなかったという、偶然によるものである。

進学するかどうかを決めたのは、成績に加えて、担任教師の激励的アドバイスなり示唆（これは好成绩の系である側面が強いが）と、家庭の経済環境および親など近親の教育関心であろう。進学するほかないと自ら志した者がいないわけでないが、重要な他者ともいべき周りの人の思惑に寄りかかる形で、大体は成り行きまかせで進学したとみることができよう。この年頃の田舎の少年には、自らの進路を自分で選ぶ能力がまだ熟していなかったのである。

次三男の主な身の振り方は、離村するか（5人）、村内他家へ婿養子として入るか（3人）であり、長兄の戦死や離村により代わって家を継いだ者（2人）や、村内で事業を興して分家独立した者（2人）も少数いる。離村者（他村に婿養子に出た者1人を含む）以外は在村することになったが、彼らも村に落ち着く前におおむね何らかの離村経験をもっている。次

三男は離村してでも自らの運命を開拓しようと試みた点で、家を守るために在村を運命づけられた長男と異なっている。

長男5人に見られた進学を契機とする離村は、村外での将来の活動に備えるものであるが、次三男の就職あるいは職探しを契機とする離村は、村外の非農的活動への準備を欠いた小学校教育を受けたままでの、むしろ未熟が武器の丁稚奉公であった。彼らは縁故を辿って職を転々としながら、自らの身丈に合う窪みnicheを見付けて定着した。どこに定着できるか、どこに定着するほかないかが、多くの場合、予め見通せたわけでない。機会を見付け、縁故を辿って、方向を調整しながら、小さな飛躍を重ねて、行き着いたところが現在の窪みである。将来に向けての長期的な展望のない、一寸刻みに築き切り開いてゆく人生コース。離村次三男は跡継ぎ長男や高等教育進学長男がもちえた長期的展望を欠いたまま、人生コースの舵を執ったのである。

地域的展開の最大の要因は就職（とくに男子において）であるが、結婚（とくに女子において）も無視できぬ要因である。そこで婚姻圏を観察しておこう。まず男子について、未婚死亡者5人（戦没者）を除く26人から、配偶者が同村出身かどうか不詳の離村者7人を除いた19人のうち、同村出身の女子と結婚したのが13人（68%）を数える（嫁取り10人、婿入り3人；同地区7、隣地区2、同村4）。つぎに、未婚死亡者2人を除く女子16人から、村外嫁入りのため配偶者が同村出身者かどうか不詳の1人を除いた15人のうち、村内婚が10人（67%）に上る（嫁入り9、婿取り1；同地区2、隣地区4、同村4）。村内婚とは同じ阿波村の人であるだけでなく、同じ阿波小学校出身者であって、いわば地域文化を共有する男女の結合である。こうした高率の村内婚がどの学年でも繰り返される結果、村内に親縁が十重二十重に巡らされ、濃密な交際圏が村内に形成されることとなる。

村に留まる限り新しく学習しなければならぬことは多くない。幼少年期から積み上げるように習熟してきた生活慣行で、村の青年として、成人として、老人としての生活が可能であるからである。しかし、彼らにも新しい学習が必要となる契機がある。その第一は、商工業生産性の伸びに比べて農林業生産性の伸びが低いことに因る農家の収入不足の深刻化のために、兼業に進出しなければならないことである。農業は親世代が引きうけ、若い世代は兼業に進出するという世代分業の形で行われることが多い。青年師範学校（1944年開設）に学んで学校教師になる、算盤学校に何カ月か通って村役場・産業組合・郵便局などに勤める、自動車学校で運転の技術を習得してバス会社や運送会社でバスやトラックの運転手をする、あるいは大工など建築関係の技術を修業して一人親方になる、という例が私の同級生にある。

男子については、徴兵検査で甲種合格し1943年末か44年早々現役入隊した者は、早く訓練を終えて外地に送られ、戦死者を出したが、徴兵検査の前に志願して海軍に入り、最後は特攻隊に編入されながら生還した者もあり、第二乙種などで召集がやや遅れた者は内地勤務で

終始した。生きて復員できた者にとって、兵役は見聞を広め多様な新しい経験をし、自動車運転の技術を習得する機会となった。集団生活の経験がない在村者に兵営生活はきびしい訓練を課したが、富農の子も貧農の子も差別なく経験年数と成績によって階級が上がってゆくシステムは、官僚制組織の経験のない彼らに新しい世界を体験させた。

長男であれ次三男であれ、また一貫して在村する者も他出先から帰村した者も、家を継いで在村する者は世帯主になって家を守り、地区で一目置かれるシニアメンバーとなると、さまざまな役職を担わねばならない。区長、農協理事、森林組合理事、農業委員、財産区議員、民生委員、消防団長、氏子総代、檀家総代など村や地区の役職に選ばれるのである。村会議員に立候補した例は私の同級生にはないが、都合で断念した例ならある。役職を果たすために新しい学習をし、また交際圏も広がり、あるいは深まる。山村の比較的狭い生活空間で呼吸しながらも、以上のような学習の契機があり、それと取り組むことによって人間として発達し成熟してゆくのである。家族生活での役割追加による学習も、この過程を内側から支えていった。

1936年尋常科卒業時の男児31人のうち、約20年後の1958年（35歳）には、在村14人、三重県内4人、関西諸県6人、東京1人、死亡6人（うち5人戦没）、それから約30年後の1989年（66歳）には、在村10人、三重県内6人、関西諸県3人、東京1人、死亡10人、生死不詳1人、さらに20年後の2009年（86歳）には、在村5人、三重県内3人、東京1人、死亡20人、生死不詳2人となっている（表1）。大まかな分析であるが、他出者がどのような地域に展開していったか、その概要を理解することができるだろう。35歳頃の地域分布がその後もほぼ維持されつつ、死亡によって人数が減っていつている。現在では7割が死亡し、中軸であった在村者も僅か5人になっているのが注目されよう。

同じ要領で1936年尋常科卒の女児18人の地域分布の変化を検討する。1958年には在村8人、三重県内4人、関西諸県3人、東海1人、死亡2人、1989年には在村8人、三重県内3人、関西諸県3人、東海1人、死亡3人、2009年には在村6人、関西諸県2人、東海1人、死亡7人、生死不詳2人となり（表1）、男子とあまり異ならない様相を示している。戦没者がいないとはいえ死亡が5割止まりで男子より有意に低いことは、想定内の結末である。男女ともに1989年から2009年までの最近20年間に死亡者が急にふえ、生存していても介護施設に入所したりなどで、面接調査可能な者は4人しかいない。

高等科卒業後、活動分野が違い住む地域も遠隔であるため、私が付き合いを続けた同級生はごく少数であった。時に耳にした同級会にも出席する機会をえず、幼少の時期に8年間も共に学んだ人たちとは遠い存在となり、今その絆もまったく絶えようとしている。

表1 三重県阿波小学校尋常科1936年卒業者の住所の推移

| 年次 年齢 | 男 子 | | | 女 子 | | | 計 | | |
|------------------|-----------------|-----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| | 1958年 | 1989年 | 2009年 | 1958年 | 1989年 | 2009年 | 1958年 | 1989年 | 2009年 |
| | 35歳 | 66歳 | 86歳 | 35歳 | 66歳 | 86歳 | 35歳 | 66歳 | 86歳 |
| 阿波村 | 14 [^] | 10 [^] | 5 [^] | 8 [^] | 8 [^] | 6 [^] | 22 [^] | 18 [^] | 11 [^] |
| 三重県 | 4 | 6 | 3 | 4 | 3 | | 8 | 9 | 3 |
| 関西* | 6 | 3 | | 3 | 3 | 2 | 9 | 6 | 2 |
| 愛知県 | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 東京都 | 1 | 1 | 1 | | | | 1 | 1 | 1 |
| 病死 | 1 | 5 | 15 | 2 | 3 | 7 | 3 | 8 | 22 |
| 戦没 | 5 | 5 | 5 | | | | 5 | 5 | 5 |
| 生死不詳 | | 1 | 2 | | | 2 | | 1 | 4 |
| 計 | 31 | 31 | 31 | 18 | 18 | 18 | 49 | 49 | 49 |
| 死亡と生死不詳 | 19% | 35% | 71% | 11% | 17% | 50% | 16% | 29% | 63% |
| 生存者のうち 阿波村在住者 | 56 | 50 | 56 | 50 | 53 | 69 | 54 | 51 | 61 |

※ 関西とは奈良・滋賀・大阪・兵庫の諸府県。

資料：1958年、1989年は阿波小学校卒業者・同窓会名簿，2009年は現地調査。

Ⅲ 師範学校の同級生

1. 三重県師範学校

1875年創立の三重県師範学校は県庁の所在地津市にあり、鈴鹿郡亀山町にあった1904年創立の女子師範学校とともに県立で県下小学校教員の養成を担ったが、以下述べるのは私が学んだ男子師範学校についてである。小学校高等科（2年もしくは3年）を卒業してから5年間在学する第1部と、中学校を卒業してから2年間在学する第2部（1908年設置）が本科で、別に現職教員を1年間再教育するための専攻科（1926年設置）があった。本科生は在学中授業料が免除される代わりに、卒業後一定期間教員として服務する義務を課された。専攻科は本科卒業後直ちに入ることもできた点では研究科に似るが、指導的教員養成課程と目されていた。「優良ナル教員」養成の正規コースをへた師範卒業生は、検定で教員資格をえた専科正教員や准教員に対比して本科正教員と呼ばれ、小学校高等科までの全科を担当する資格をもち、現場の経験を積んだ後、事故がなければ退職前には校長になることが約束されていた。とくに専攻科修了教員は校長候補とみなされた。

私が三重県師範学校に入学した翌々年の1940年には、師範卒業者は5カ月の現役に服務すれば第二国民兵役に編入されて召集を免除されるという、教員確保のための短期現役制度が廃止されるので、徴兵による教員不足に備えて、師範学校の生徒数したがって学級数も増加される時代に入っていた。入学の前年には本科第1部の入学定員が60人から70人に増え、入

学の翌年には本科第2部の入学定員が30人から60人（2学級）に倍増し、その翌年には本科第1部の入学定員が70人から110人（3学級）に急増し（ただしこれは1年だけの試みに終わり、その翌年には旧の70人に復した）、さらに満蒙および中国方面の日本人小学校の教員養成のため入学定員30人2年課程の、本科第2部に準じた大陸科（近畿諸県では三重師範のみ）が新設された。こうして、私たちの本科第1部入学時に専攻科49人を含めて412人であった生徒数が、卒業前には専攻科50人を含めて637人と1.5倍に増えており、先生（教諭）の数も校長を除き39人から48人へ1.2倍に小幅ながら増えていた。私が卒業して直ちに東京高等師範学校に入った1943年4月に、専攻科を含めれば中学卒から3年の課程をもつ師範学校は、県立中等学校から官立専門学校に昇格し、母校は三重師範学校と改称された。

旧津藩藤堂家32万石の津城二の丸址に内堀に面して立つ白亜3階建て本館ビル（1931年竣工）を中心に、木造の校舎が棟を連ねていた。本館1階に校長室・職員室・事務室、2階中央に図書室、3階に講堂があり、木造平屋の別棟に屋内体操場、その他のスペースは共用の普通教室か技能系学科専用の特別教室に充てられていた。

学科は時代によって変動したが、私の在学中は、1～2年は修身、国語（講読・作文・文法・習字）、漢文、歴史、地理、英語、数学（代数・幾何）、理科（博物・物理・化学）、実業（農業か商業）、図画、手工、音楽、体操、武道（剣道か柔道）、教練、3年で教育学と心理学が以上の学科に追加された。4～5年では英語と習字がなくなり、その代わりに公民と、生徒各自の選択によるいわば専攻学科（1931年度に開始されて増課と呼ばれ、2学科週計6時間）が加わる。（中学校では増科に週約12時間をあて、英語・数学など受験科目を強化した。）5年1学期には隣接の附属小学校（選抜入学の定員制）と代用附属と呼ばれた近郊農村の通常の小学校とで教育実習を12週間行い、教室での授業は増課と東亜という名称の1940年度新設の科目しかなかった。5年の2学期以降は元に復したが、学校管理法が追加された。英語は3年どまりであるうえに週3時間ほどと少なく、ほとんど読み方と和訳だけであったから、履修とはほど遠かった。小学校教員に英語は要らない、簡単な単語を知っておけばよい。それよりは、音楽・図画・手工・体操を含めて全科の指導ができる訓練を受け、教員のための教育学・心理学さらに学校管理法といった「教育」科目を受講しておくのがよいという、小学校教員養成方針が学科目配置の基本にあったに相違ない。

教員養成方針にかかわる時代背景としてつぎの2点が注目に値するであろう。第一は、1936年10月の文部省教学刷新評議会答申に、「教員ノ養成ニツイテハ、専門的知識ト共ニ特ニ国体ニ関スル教養・体認ニ重点ヲ置キ」[高野2006: 610]とあり、これを受けて文部省が1937年3月師範学校に対して、とくに修身・公民・国語漢文・地理および歴史の要目改定を命じ、これらの学科で国体の明徴と皇国精神の作興を図るよう指示したことである[三重大学教育学部同窓会1977: 307]。しかし、国史の教科書が全面的にこの趣旨から編纂されてい

たほかは、文部省が意図するようにとくに誘導された記憶はない。

第二は学校教練の重視である。師範教育の一環をなす全寮制において軍隊式の規律および集団訓練が顕著であったが、この地盤のうえに1925年の陸軍現役将校学校配属令が受けとめられて教練が本格化し、とくに日中戦争の拡大に伴い学校の軍隊化が進んだ。教練は週4時間のところ補欠授業で週7時間に上ることもあり、上級生は軍事講習と称して久居の陸軍歩兵第33連隊に1週間入隊して訓練を受け、また野外演習に加えて実弾射撃訓練さえ行われた[同上: 322]。第一点と異なり、教練の重視による学校の軍隊化は生徒の学習生活を拘束し、さらに寮生活にも浸潤して軍国主義的色彩を強めた。

本館の裏側（西）には誠之寮（1940年校訓に因んで命名）という2階建て6棟の学寮があり、1寮から順に各寮をへて食堂に至る東、中、西、三条の長い渡り廊下が全体を一つに繋いでいた。本科生に係わる全寮制の学寮は、師範教育の場として重要であった。1寮に6室（第2寮にのみ最上級生が交替に詰める週番室があるため5室）、6寮で計35室に本科生全員が収容されたから、私たちの入学時には平均10人であったのが、卒業時には平均15人近くになっていた。1階が自習室、その真上の2階が寝室で、最上級生（第1部5年生と第2部2年生）が正副寮長、正副室長として寮生活を統率した。部屋割りは始めのうち学年ごと（ただし第1部4年生と第2部1年生、第1部5年生と第2部2年生は同室）になされたから、どの部屋は1年生、あるいは2年生というように識別できたが、私が5年生になったときどの部屋も全学年混合に改められた。学年ごとの部屋割りの間は同室の同学年生相互のヨコの連帯性が緊密となったのに対して、全学年混合の年には、全寮の寮生長の役が新設されたことも加わって、タテの統括体制が強まった。この改革は学校報国隊が編成され太平洋戦争が始まったその翌年1942年に実施された。

寮では上級生に対する礼儀が強調され、新入生は上級生とくに5年生から集団的にしごかれた。時間の余裕がある土曜日の夕方などに、5年生の部屋から何人かが群をなして1年生の部屋を襲うのである。暴力は振われなかったが、生活態度や日常行動のごく些細な点に文句をつけて口々に大声で怒鳴りたてられると、集団生活に不慣れで寮生活の暗黙のルールに疎いためしくじりがちであるうえに、怒鳴られた経験のない新入生たちは震えあがった。虐めといってもよいこの行為を「シボル」といい、5年生はシボルことに快感を覚え、純真な1年生は恐れ戦いたのである。全学年混合の編成になってからはこうした行為は影を潜めたが、その代わり各部屋で上級生が下級生とくに1年生を私用に使役することが蔓延したようである。それでも、何年にも及ぶ共同生活のなかで、同級生の間はもちろん、上級生と下級生の間にも同じ運動部あるいは同郷の先輩後輩としての友情が育まれた。しかし、旧制高等学校の学寮について伝えられるような自治はなく、上意下達的な統制が貫徹していた。寮生活は寮生の自治的な切磋琢磨によって自律的人格を育てる場ではなく、上からの権威的統制

に従順な人材を育成する場だったといえよう。それはつぎのような日課にも示されている。

朝5時半(冬は6時)起床のベルとともに跳ね起きて、雨天でなければ運動場に、雨天なら演武館(1916年建設)に寮・室の番号順に整列して、舎監(教諭が兼任)の臨検のもとに点呼があり、週番の号令のもとに伊勢神宮遙拝・皇居遙拝・建国体操・乾布摩擦をした。朝食は麦飯・味噌汁・沢庵といったところ、第6寮の先の平屋建ての食堂に集まってとる。授業は朝8時から午後4時まで。夕食は午後5時半(冬は5時)、麦飯に副食物は野菜類と決まっていた。そのさい行事予定といった集団的な事項だけでなく、手紙が届いているとかの個人に関する事項も、あわせて週番から伝達された。夕食後午後9時まで絶対静粛の自習時間があり、それが終わると舎監が週番と寮長を従えて各寮の廊下を巡り、室内に整列した寮生の点呼を行なった。点呼がすめば寮生は2階の寝室に上がってゆき、9時半には消灯となるが、まだ勉強をしたい者は終夜燈の読書室へ行く。平日には週番が各室を巡視して、掃除の具合や個人の人衣服の整頓状態を注意した。生活規律の集団的訓練については、軍隊の内務班がモデルとされたのであろう。

放課後から夕食時刻までの間、1週間に何回か決まった曜日に、寮生は自分の選んだ運動部の練習に参加した。生徒は必ずどれかの運動部に所属することになっており、部活動が奨励されたので、運動選手に人気が集まった。

運動部が活躍する時間はまた外出が許される時間であった。舎監室の前に寮生全員の門鑑を部屋順に掛けたボードがあり、寮生は外出するときには、そこから自分の門鑑を外し守衛詰所脇の門鑑ボードに掛けて校門を出ることに決められていたので、帰寮時刻に遅れた寮生は一目で特定された。自宅が近い者は休日ごとにでも帰宅できたが、特別の事情のない限り外泊は認められなかった。自宅が遠方の生徒は夏・冬・春の休暇でないと帰宅できなかった。外出しても飲食店・映画館に立ち寄ることは許されず、また自宅からの食品の送付も禁じられていた。しかし、密かに菓子や食品を持ち込むことは日常的に行われており、これだけは目に見られていたようである。

第1寮の隣に1937年落成の修道館と呼ばれる建物があった。神殿の間の奥の壇上に皇大神宮の大森と鎮守高山神社(津藩祖藤堂高虎を祀る旧県社)の神符を奉祀する神殿が安置され、寮生は早朝各室交替で祝詞をあげ拍手をうって神前奉仕を勤めた。文部省の教学刷新評議会特別委員会が1936年9月寛克彦委員が主張した校内神社または神棚の設置[高野2006: 484]が、礼拝を伴った模式的な形でここに見られるのである。

寮を挟んで本館とは反対の端に演武館があり、131坪の内部は床が板張りの剣道場と畳敷きの柔道場に別かれ、武道学科と部活動のほか1月中旬1週間の寒稽古に用いられた。対校試合に出場する選手団の壮行会、中秋の名月の観月会、舎監の特別訓示といった全寮生の集会のさいにも、会場として用いられた。食堂と同じ棟に浴室があり、また寮生に麺類や甘い

物を売る「鬱散」というコーナーがあった。「鬱散」は入学後しばらくして廃止となったが、学用品販売のみ第2寮の週番室の2階部分があるために留保され、生徒の販売部によって運営された。また、業者による理髪室があり、校医が診察する診療室があって、健康を害した寮生が入る病室も付設されていた。

このように、学寮には当時の庶民の生活レベルを維持するに必要な施設は整っていたが、寮生をその中に閉じこめて規則に従った生活をさせ、規則違反には厳しいペナルティをもって報いたことは軽視できない。校医の診断をへず舎監の許可を受けない病欠は無断欠席として謹慎処分となった。4年次の3学期に喫煙の動かぬ証拠を握られて退学処分になった生徒もいる。寮は教育的な目標をもって設置されたはずであるが、万事につけ統制が強化された時代であったとはいえ、初等教育の担当者を養成する教育機関で一罰百戒的な厳罰が行われた事実は記憶に値しよう。

以上、三重県師範学校生徒の生活を校舎での授業と寮生活の両面から概観したのであるが、こうした日常生活にアクセントをつけたのが年中行事であり、学年に配分された行事であり、また時局に対応して実施された行事である。年中行事としては、入学式・卒業式、運動会・音楽会、祝祭日を除けば、まず夏季休暇に入る前の7月10日から2週間、毎日午後津市の賢崎海岸で全本科生を対象として行われた水泳訓練を挙げなければならない。近代泳法のほか旧津藩の観海流泳法が伝授され、訓練が終わる頃には遠泳の試験があった。2学期が始まった頃に上記の中秋の名月観月会が催され、1月には1週間の寒稽古が行われ、2月には朝5時に校門を出て参宮街道44キロを踏破する強歩の神宮集団参拝があった。これらのうち水泳訓練は、正式の水泳指導を受けていない多くの生徒に貴重な学習の機会を与えた。

つぎに学年ごとの行事とは修学旅行である。1学年では植物採集のために三重郡湯の山に1泊2日の旅行をして鎌ヶ岳に登り、2学年では磯や浜の生物を採集観察するために志摩郡答志島の桃取村に2泊3日の旅行をした。3学年では吉野・橿原・飛鳥・奈良・京都・宇治・比叡の社寺参拝と遺跡見学の7日ほどの旅行、4学年では伊勢朝熊ヶ岳山頂の臨濟宗南禅寺派金剛証寺での座禅体験旅行、5学年では湘南・東京への7日ほどの旅行をした。1930年以来5学年で満鮮旅行が例となっていたが、1939年度をもって停止されたため、かつて4学年で実施していた東京方面への修学旅行を5学年に繰り下げたのである。奈良・京都方面、東京方面の修学旅行は伝統日本と現代日本の両面を見学させるもので、有益であったことは言うまでもないが、1,000米を超える山に登って行く植物採集、島の海岸での生物観察も、地方都市出身者にはもちろん、田舎出身の生徒にもきわめて啓発的な意義をもつものであった。

時局に対応して実施された行事としては、先に述べた軍事講習や野外演習に加え、文部省訓令によって1941年9月に編成された三重県師範学校報国隊の訓練があり、これらが学習に部活動にまた寮生活に緊張を増幅させ、余裕の乏しいものにした。

本節を閉じる前に、師範学校の編成に関する重大な変革構想がこの時期に登場していたことを付言しなければならない。それは師範教育の本体は何かという問題であって、本科第2部が1908年に設置されたときには、小学校教員養成において第1部を補充するものと位置づけられたのであるが、1931年第2部の修業年限が1年から2年に延長されたさい、第1部と対等の教員養成の本体と改訂された。さらに1938年11月教育審議会の委員会において、中等学校卒業程度をもって師範学校の入学資格とするという改革構想が可決された。この構想は後年の専門学校への昇格に繋がるものであるが、師範学校の第1部を廃して第2部のみを本体とするの提案に外ならぬことに注目しなければならない。私たちは第1部こそ師範教育の本流と思い込んで自らこれを誇りとしていたが、第2部が対等になっていたことすら知らず、逆転して第2部こそ本流となる時潮に身を曝していたのである。

この構想に対して、下村寿一臨時委員（東京女子高等師範学校長）が入学者に高等学校・実業専門学校受験の落伍者ばかりが増加する危惧ありとして反対したのは〔国立教育研究所1974:1331〕、頗る興味深い意見であり、第1部生徒の共感をそそるところといえよう。師範学校入学者の学歴中最終学校卒業成績調べによれば、1939年度で本科第1部は甲（成績上位1／5以上）81%、丙（成績上位2／5未満）9%であるのに対し、第2部は甲20%、丙51%であって〔同上:1343〕、下村委員の指摘の正しさを証拠だてるとともに、私たちの感觸的推測を裏づけるものであった。

2. 1943年卒業の同級生

私たちは1938年4月に三重県師範学校本科第1部に入学して、上記のような学園生活を共にしたのだが、さらに言えば、次第に深まる食糧不足が食べ盛りの少年たちからゆとりを奪い取る、そういう時代の経験を共有した、同期70人である。

昭和恐慌期には5倍近く（全国平均では5倍強）あった競争率が1934年から低下し始め、私たちが受験した1938年には約2倍（全国平均では3.3倍）に落ち込んでおり、以後高まることはなかった〔三重大学教育学部同窓会1977:267〕。低い競争率で合格したことがどんな意味をもったか、この点は問うことをやめて、まず70人の属性を概観しておこう。

70人のうち、3人のみ旧制中学校2年修了、66人が小学校高等科2年卒、残り1人は同3年卒であり、生年は1923年度生まれ65人、22年度生まれ4人、21年度生まれ1人であった。22年度生まれの1人は高等科3年卒、残り3人は前年度の入試に失敗し、博物科・手工科など助手が必要な学科の助手を1年勤めた後、再受験して合格した少年たちである。小学校入学時に比べると、前歴と年齢の点で僅かながらばつきが出ている。

小学校同級生の出身地は阿波村1カ村に集中したが、師範学校では出身地（保護者の現住所）が全県各地に分散していた。当然のことであるが、まずこの点を確認するために表2に

よって70人の出身地分布をみると、伊勢北部15人、伊勢中部15人、伊勢南部16人、伊賀9人、志摩6人、紀伊（南北牟婁郡）8人となり、県外の1人も本籍は南牟婁郡だから、三重県出身に限られかつ全県各地から入学していることが明らかである。この分布が県下学童数の地方別分布や教員数の過不足の地域差とかりに対応していなくとも、その落差は卒業後の人事配置で解決される問題である。

では、どのような動機から師範を選んだのであろうか。千葉師範の1925～1947年度男子卒業生に対する1979年サンプル調査に拠って分析した明石要一は、1部生では、家の経済的理由37%、まわりの人のすすめ35%、教師になりたかった28%、2部生では、まわりの人のすすめ57%、教師になりたかった38%、家の経済的理由5%で、1部生と2部生とで主な入学動機が異なることに注目している〔明石1981:470〕。この結論は予想される場所であるが、質問の選択肢が適切でないように思われる。というのは、「まわりの人のすすめ」と「(本人が)教師になりたかった」とは一応対置されるが、1部生では必ずしもそうとは言えないところがあるうえに、「家の経済的理由」は「まわりの人のすすめ」の背景にありうるし、また本人による選択の背景にもありうるからである。私は統計的調査をしていないので反論にならないが、何人かからの聞き取りからえた印象を述べることは許されるだろう。

私のみるところ、まわりの人の勧めがあって本人もその気になり、師範第1部を志願したのであった。まわりの人には近親に加えて小学校の担任教師がある。先生が師範を勧める主な理由は本人の学業成績がよいことである。事実、私の同級生は小学校でおおむね級長を勤めた少年たちであった。近親を親で代表させれば、親は例外なく子どもの学校や担任の教師に尊敬と信頼を寄せ、しばしば身近にモデルになる教師がいて教員という職業に親近感があること、次三男に財産分与代わりに学資を投じるのなら教員は手頃な職業だと考えるなり、長男であれば農家を継ぐにしても農業以外の仕事に就かせたいとの思いから教員を選ぶこと、中学に入れば必要となる更なる進学に家の経済的事情が耐ええないこと、しかも師範学校では授業料が要らず、自由がない代わりに膳をしてくれる寄宿舎は生活費が下宿に比べて安く、一部の師範学校（例えば東京の豊島師範）のように給費が与えられずとも、総じて学費が比較的低廉であること、さらに短期現役制度による第二国民兵役への編入は家の後継者確保のために魅力的であったことなど、そのうちいくつかが複合的に作用して、本人に師範第1部を勧めたのである。尋常科卒業のとき中学校に進学させる機会を逸したというよりは、中学受験を意図的にパスさせたといっただけだろう。

狭い社会空間で育った精神的にも未熟な本人には、自分の適性を基準に職業を選択するだけの経験と判断力がなく、まわりの人とくに親の勧めを自らの志望としたのである。師範に入ることはどういう運命を選択することになるか具体的に予測する能力を欠いたまま、総体としてかなり他律的に無邪気に師範学校を志願したといえよう。すでに大正末年の文政審議

会において、「第一部の入学年齢が低く、自分で職業選択の判断が出来ない者を収容し」、「教育者タル志望未ダ確定セザル時期に入学セシムル」などと指摘されている〔国立教育研究所1974: 615, 622〕。他方中学校へ進んだ少年は、職業選択の時期を数年遅らせることができたわけで、それだけ自主的な選択が可能になったはずである。

70人は甲乙の2組に分けられ、学年ごとに組み替えが行われたので、同じ本科第1部に関するかぎり同期生即同級生といえる状態であった。正副級長は生徒の選挙ではなく、多分学業成績によって任命されたのであろう。学期ごとに成績が出るので、正副級長は学期ごとに改めて任命された。1学年1学期は附属小学校から来たスポーツ万能のU君が甲組の、私が乙組の級長になり、2学期・3学期は副級長は交替したが、級長は再任され続けた。2学年の組替えで私が甲組級長、U君は乙組級長と入れ替わった。僻村小学校出身の私の学級指揮が下手だったのに対して、県下最優良校である附属小学校から来たU君の指揮ぶりは見事で、誰がみてもその格差が明瞭だったからであろう、3学年以降はU君が甲組級長、私が乙組級長と定まった。甲組級長は自分のクラスだけでなく学年全体を代表する学年長のような役割を担ったので、乙組も求心力をU君に期待し、彼はその期待に応える才能をもっていた。他方、私は影の薄い期待されざる存在であったが、後に述べる進学準備に時間を割くことができたのはこの状況のお蔭だし、U君の指揮技術を密かに学びつつ長はどうあるべきかを自らに問うことで、私の能力も遅ればせながら開発されていったようである。小学校では尋常科3年から級長が指名され、私は高等科卒業まで6年間級長を勤めたが、号令係・連絡係以上のことはとくに期待されない、その意味では名だけの級長であった。師範学校では級長の役割がより実質的なものであったにもかかわらず、私はU君のお蔭で名だけの級長に甘んじさせてもらい、それでいて彼から学んだ指揮技術と自ら磨いた長としての心がまえが、東京高等師範学校に入学してから多数の同期生を指揮することを私に可能にした。

1938年第1部入学者は入学後満5年をへて1943年3月卒業のところ、同年4月師範学校が県立から官立の専門学校に昇格したため、その第1期生となって同年9月に卒業した。ただし、進学のため3月末をもって旧制の扱いですでに卒業したのが4人、病気（おおむね肺結核）のための休学が6人、退学1人、病死（肺結核）1人、計12人を除く58人が卒業し、海軍予備学生や陸軍特別操縦見習士官として早期に入隊した後述の10人以外は、おおむね出身地に近い国民学校に訓導として赴任した。58人の出身地（親の現住所）は他県の寄留地から本籍地に帰った1人を除き入学時と同じであった（表2）。

今日小学校教員になるには、まず教員免許状を取得し、つぎに採用試験に合格して、採用決定を待たなければならない。しかし、教員養成の旧システムでは、師範学校を卒業する直前に県から教員免許状が交付され、卒業の日に訓導任命書と任地の辞令が渡されたのである。卒業しても採用されない、任地が決まらない、ということは考えられなかった。その代わりに、

表2 三重県師範学校本科第1部1943年卒業者の住所（帰省先）の推移

| | | 年次 年齢 | 1938年 (入学時) | 1943年 (卒業時) | 1964年 (卒業20周年) | 1974年 (卒業30周年) | 2003年 (卒業60周年) |
|-----|--------|----------|-----------------|-----------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| | | | 15歳 | 20歳 | 41歳 | 51歳 | 80歳 |
| 伊勢 | 北勢 | | 15 [^] | 14 [^] | 13 [^] | 13 [^] | 4 [^] |
| | 中勢* | | 15 | 9 | 12 | 12 | 7 |
| | 南勢 | | 16 | 13 | 5 | 7 | 2 |
| | 志摩 | | 6 | 6 | 6 | 3 | 3 |
| | 紀伊 | | 8 | 8 | 5 | 5 | 5 |
| | 伊賀 | | 9 | 8 | 6 | 6 | 3 |
| 県外 | 岐阜・愛知 | | 1 | | 3 | 3 | 2 |
| | 東京・神奈川 | | | | 3 | 3 | 3 |
| | 京都・高知 | | | | 1 | 1 | |
| | 小計 | | 70 | 58 | 54 | 53 | 29 |
| 学事 | 進学 | | — | 4 | — | — | — |
| | 休学 | | — | 6 | — | — | — |
| | 小計 | | — | 10 | — | — | — |
| 員数外 | 退学 | | — | 1 | 1 | 1 | 1 |
| | 病死 | | — | 1 | 5 | 6 | 28 |
| | 戦没 | | — | — | 10 | 10 | 10 |
| | 不詳 | | — | — | | | 2 |
| | 合計 | | 70 | 70 | 70 | 70 | 70 |

※ 安芸郡・津市・久居市・志摩郡。資料：三重県師範学校職員生徒名簿。

必ず教員になって指定された任地に赴任しなければならぬ。しかも一定期間県下の小学校に教員として勤務しなければならぬという、職務義務年限に縛られていた。授業料が免除された代償である。陸軍士官学校や海軍兵学校なみに学費が公費丸がかえであった時代には、義務年限は10年と長かったが、公費による給付が減少するに伴い職務義務年限も短縮され、私たちの時代には2年ほどであった。

この制度のもとでは上級学校への進学に厳しい壁が立ちはだかっていた。進学は教育系の上級学校に限られた。それも、学校長の推薦により県知事の許可をえた者だけが受験できたのである。師範教育における英語の無視に近い軽視はこれと結合していた。中学校での英語の重視が進学と結合していたことのネガとみるべき現象である。

私たちは寮生活で進学志望の上級生が受験準備に苦闘する姿を目のあたりにし、失敗の噂も耳にした。正規の科目のなかの受験科目で受験向きの指導が欠けていたことよりも、英語の学力の弱さが決定的であった。進学に成功した人たちはおおむね中学校で英語をみっちり

叩きこまれた2部生か、中学2年から師範の第1部に転進した人々であった。ともあれ進学できたのは、4年上の本科1部生で3人（うち2人は東京高師文科、あと1人は広島高師文科）、3年上の本科2部生で1人（東京高師文科）、2年上の本科2部生で1人（東京高師理科）、1年上には1人もいなかった。しかるに、入学試験の競争率が最低であった私たちの期からは、東京高師文科へ2人、広島高師文科へ1人、東京農業教育専門学校（1937年設立）へ1人、計4人という前例のない成績で、しかもみな中学校の経験のない1部生であった。

学校全体が教員養成をめざし、同級生のほとんどすべてが教員になるものと自己規定しているなかで、これら4人が制度的にはもちろん人数のうえでもまったくのマイノリティである進学を選択したのは何故か。その一つの大きな要因は先生（教諭）方の激励である。制度的には進学は異端の道であるにもかかわらず、先生方は進学に好意的であり、学力をつけるための補習も進んでしてくれた。それは、先生方に師範学校の教員養成機関である高師出身者が少なくなく、かつて同じ道を辿った先輩であるうえに、高師出身でなくとも、小学校教員で満足して勉学の手を抜き、積極敢為の意気の乏しい大多数の生徒に対する密かな不満からではなかったかと思われる。1人は4年生のとき進学希望を担任にうち明けたところ、喜んで助けてくれたのが大きな励みとなったという。1人は5学年の夏休みに家庭訪問で来宅した担任から高師を受験せよといわれ、困惑している父親を説得してくれたので、本人もその気になり、2学期は病気の名目で授業を欠席して受験勉強に集中したという。1人は3年生で進学を決意したところ、たまたま英語担当であった担任が骨身を惜しまず1対1の個人指導をしてくれたお蔭で、英語を基礎からやり直すことができた。

もう一つ注目すべきことは、進学者は多かれ少なかれ志をもっていたことである。小学校高等科から師範への進学には、成り行きに身を委せた側面を否定しがたいが、師範からの進学はそれとは逆で、成り行きに抵抗する本人の主体的な選択が顕著であった。1人は叔父の影響で師範学校のレベルを超えた実学を学びたかった。1人は担任の足跡を追って英語で身を立てようと思った。1人は、師範を首席で出てもビリで出ても月給48円は同じ、それなら遊べるときに遊ばねば損だと勉学から逃避する生徒の風潮、休暇に訪ねた母校の小学校職員室では、児童や教科のことが話題にならず、米の出来具合や林業の景気といった世間話しか出ない職場、そういう三重県初等教育界から脱出しなければならぬ、脱出のためには進学しか道はないと考えた。強弱の差こそあれ、このように志をもった主体的な選択が明確なのである。中学2年から師範本科第1部に入り、東京高師に進学した4年上の先輩は、高師を出れば初任給が師範出の初任給の2倍というのに惹かれて進学したと語ってくれたが、私たち4人のなかには収入の高さを比較して進学した者が1人もおらず、向上への志が進学の動機となった。そうした志は当時の師範教育への批判、すなわち師範教育は若者から将来に拡がる志望を抑えつけ、向上心を萎えさせるとの批判と結びついた。進学しなかった同級生の多

くが、戦時中の寮生活には問題はあったにせよ、幅の広い（音楽や図工を含む）教養を培ってくれたと師範教育を肯定的に評価しているのと、鮮やかな対照をなしている。

専門学校への昇格によって、師範学校卒業生にも海軍予備学生や陸軍特別操縦見習士官（特操）を志願する資格ができた。昇格の余恵のような思いもあって志願したのであろう、9人が第13期飛行科予備学生に採用されて1943年9月の卒業式を待たずに入隊し、1人は第1期特操に採用されてこれにつづいた。予備学生のうち4人、特操1人が44年3月から45年6月にかけて戦没した。戦死者のなかに、紀州田辺沖に集結した米空軍B29を邀撃して1機を撃墜し、後続機を体当たり攻撃で撃墜して、2階級特進の偉勲を立てた者がいる。

海軍予備学生に応募する決意で帰省して父に相談したところ、「お前を師範に入れたのは先生にするためだったのだから、半年でも先生をやってからにしてくれ」と言われ、結果的に生命拾いをしたM氏は、「あの時の僕たちの気持ちは、聖戦に参加することを男子の本懐と考え、戦場に出て捨てる命は鴻毛より軽しと考えよとの臣民の道を叩き込まれていた、だからなにも（戦争について）判断する能力をもたなかった」と告白し、皇国のため国難に殉じた同級生たちの純粋な気持ちを哀れんでいる〔三重師範学校1964: 37〕。

上記10人を除く48人は先述のようにおおむね出身地に近い国民学校に赴任したが、大半は1949年4月現役兵として入隊し、現役に漏れてもつぎつぎと召集されて営門をくぐった。かねがね学校教練で鍛えられているため、体格検査で不合格とならないかぎり初級将校コースの甲種幹部候補生に採用され、うち飛行科将校になった者など3人が戦死した。戦病死2人を加えると、前記予備学生・特操の5人を含めて計10人が戦没したことになる。休学していた6人のうち5人は1年遅れて卒業し、合流した。かくて生きて戦後を迎え、県下で教職に復帰できたのが53人（70－戦没10－進学4－退学1－病死2）、同級生の76%であった。

復員後ただちに入隊前に勤務していた国民学校に復職したが（予備学生で生還の4人は新任）、1947年4月新制中学校の発足に伴い、人事異動によって小学校と中学校を渡り歩くことになる。しかし、職務義務年限が過ぎると、3人が家業（農林業・町工場・小売業）を継ぎ、2人が自衛隊の幹部コースへ転進し、1人が京都大学を卒業して銀行員になるなど計7人が教育界に見切りをつけて去り、教職に留まったうち2人が県外に転じて、結局残りの44人（70人の63%）が師範学校入学時の目標どおり三重県初等教育界を担って人生コースを走ることとなった。教育系の上級学校へ進学した4人のうち1人だけ三重県に帰って高等学校の教員となり、同級生の隣部屋で活動するような人生を選んだが、他の3人は大学教授となって、東京・名古屋・舞鶴で三重県初等教育界とは関係のごく薄い道を歩んだ。

教員の人生コースは勤務校の移動と平教員から校長への昇格とを含む人事異動によって彩られている。異動の地域的範囲はおおむね同一の地方教育事務所の管轄範囲の小中学校であった。それは隣接した2郡市か、辺鄙な地域では1郡の範囲であって、自宅からなるべく

通勤可能な学校に勤務したい教員側の要求に応じるものであるとともに、地域の事情に通じた人材を確保したい県教育委員会の要請にも対応しうる体制であった。しかし、それでは異動の範囲が限定され、多様な現場経験がえにくくなるため、校長になる人材の養成には欠陥なしとしない。そこで、地方教育事務所の統合が行われ、例えば津と久居は統合されて中勢に、伊勢と志摩は南勢志摩に統合されて、3～4郡市を管轄する北勢・中勢・松阪・南勢志摩・上野（伊賀）・北牟婁・南牟婁という7地方教育事務所制に改められた。人事異動は依然として旧事務所管内で行われるが、旧管轄間の人事交流は行われやすくなり、新管内を超える人事も、（婿入りによる）転居など教員側の希望や教委側の人材配置上の必要によって、随時行われている。ともあれ、異動により一定範囲内の小中学校を転々としながら、最後には出身地の、少なくとも最寄りの小中学校校長となって郷里に錦を飾った。卒業時の住所分布と、死亡者がまだ2割強だった卒業30年後の住所分布とに大きな差異は認められないのは(表2)、このゆえである。そのなかで差異の大きい地方は、戦没者と県外転出者を比較的多く出した地方である。

念のためいくつかの例を掲げよう。志摩郡出身のM氏は、兵役前と合して教員15年半、教頭9年、校長14年、計38年半、旧志摩教育事務所管内の11校で勤務。同じく志摩郡出身のN氏は、兵役前と合して教員18年、教頭4年、県教委6年（伊勢志摩教育事務所勤務）、校長10年、計38年間、旧志摩教育事務所管内の8校と県教委で勤務。一志郡出身のO氏は、兵役前と合して教員20年（うち3年は三重大学附属中学校）、県教委8年（中勢教育事務所勤務）、校長11年、計39年間、旧久居教育事務所管内の6校と県教委、三重大学附属中学校に勤務した。志摩郡出身のT氏は、肺結核療養の7年を除き、兵役前と合して教員9年、教頭6年、校長14年、計29年間、旧志摩教育事務所管内の9校で勤務。度会郡出身のU氏は、兵役前と合して教員17年（うち三重大学附属中学校11年）、県教委8年（県教委と3地方教育事務所勤務）、教頭6年（三重大学附属中学校）、校長7年、計38間、伊勢志摩・中勢・北勢3教育事務所管内の8校と県教委、三重大学附属中学校に勤務した。おおむね教員－教頭－校長というコースであって、教頭になるには地方教育事務所での教頭試験に合格する必要がある、校長に昇格するには県教委での校長試験に合格する必要がある。戦時中までは年功により早晩教頭、校長へと昇進したが、戦後は試験に合格することが要件となった。教頭－校長の間に県教委勤務という教育行政に関わる者が少なくないが、U氏のように3地方教育事務所管内を渡り歩いたり、県教委の事務局に入ったり、三重大学教育学部附属中学校の教頭（副校長）を勤めるといった、広い経験を積んだ者は稀である。

私の同級生は先述のように官立専門学校を卒業した扱いになっているが、師範学校は教員養成に特化されて普通教育の面では中学校に劣ったのに加えて、戦時中のことと勤労奉仕や軍事教練に授業時間を大幅に奪われ、さらに修業年限が6ヶ月短縮されたため、専門学校

卒業者にふさわしい学力を身につけたとはいいがたい。そこで、戦後、再教育を受ける努力をした者がいる。内地留学経験者は少ない数ではないだろう。上記のT氏は玉川学園教育大学で4ヶ月の研修を受けた。稀にみる幅広い活躍をしたU氏は、法政大学文学部の通信教育を受講して高等学校国語科の2級普通免許を取得し、選ばれて国際教育会の米国短期留学さえ果たした。

その外に、絵画・書道・彫刻・短歌・音楽などで玄人はだしの業績を挙げた者が何人もいる。1, 2の例を挙げれば、上記のT氏は三重アララギの代表的歌人であって、歌集『耕庭集』(2003)を出している。また、N氏は1990年代に連年地元で絵の個展を開き、画家として一家をなした感がある。その多くは師範学校当時の増課の延長として技術を錬磨したもので、在職中は教育の現場で生かされ、退職後も倦むことなく修練を重ねている。

卒業後、訓導として県下各地の小学校に赴任した同級生は、級長のU君の先導のもとに時を移さず同窓会を結成し、昭和18年卒業に因んで「いちはず会」と命名した。翌年1月には『進軍』と題する文集を発行したのは、出征前に何かを残してゆきたい、という思いからだったという。敗戦直後の1946年に活動を再開し、1955年からは連年総会を催した。1964年には卒業20周年記念として『進軍』改題『いちはず』第2号を発行し、1974年には卒業30周年勤続表彰の記念に家族写真集『ねんりん』を発行した。これは同期の1部生・2部生合同である。長く1部生だけの「いちはず会」であったが、卒業40周年の1983年から2部生が合流し、会は同級会から同期会となった。県下教育界では1部・2部とも隔てなく1943卒として処遇されているのであるから、これは自然な展開というべきであろう。卒業50周年の1993年には、戦没者に戦後の死亡者を併せ、さらに在学中の死亡者を加えて、物故同期生全員を追悼する『鎮魂録』を編み、以後も毎年死亡者が出るたびに追補を作成した。卒業60周年の2003年に至って、生存者が最初の半数を割り、すでに齡傘寿を迎えたのを期に解散することとなった。翌年からは「いちはず有志会」の名称で十数人が集まっているが、同級生の集合活動は終わったに等しい。

三重師範同級生が辿った人生コースについての考察を、いわゆる師範タイプの検討でしめくりたい。私たち生徒の学帽は、陸軍の旧軍帽のように桶型で、針金の筋で縁どってあるところから、世間ではオケというやや冷笑的なニックネームで呼ばれ、生徒は学帽に象徴されるような型にはまったパーソナリティタイプをもつかのように見られていた。

師範タイプに対して早くから批判の声が喧しかった。まず文部省の文教政策会議での発言をみれば、大正中期の臨時教育会議で日本女子大学校長の成瀬仁蔵(1858-1919)は、自由主義的個性開発的な立場から師範教育を批判して、「陰險ナル思想、又陋劣ナル競争心ガ多クテ、義務心ニ乏シイ人ガ却テ出ル」状況になっていると述べ[国立教育研究所1974: 593]、大正末期の文政審議会で帝国教育会々長沢柳政太郎(1865-1929)は、師範教育がつくる「師

範気質」を、「偏屈」「小サナ鑄型ニ這入ッテ」ゆとりがなく「表面ダケハ先生ラシイ行動ヲ致シマシテ、所謂偽善的ナ人間」と酷評し〔同上: 615〕、昭和初期の文政審議会で文部次官中川健造は、師範学校当局者の意見を紹介して、本科第1部生は「規律」という点では優れているが「型ニハマル」欠点があることを、「素直ノ教養ヲ受ケテ居ル」第2部生に対比し、帝国学士院会員藤沢利喜太郎は、従来の師範教育は「鑄型教育」であったと批判している〔同上: 621〕。また、文部大臣を勤めた法学者田中耕太郎（1890-1974）は師範教育を面従腹背の教育と断罪した。

つぎに教育史研究者の見解をみると、昭和期千葉師範生の分析を試みた明石要一は、先行研究を要約して、卑屈で姑息因循なパーソナリティをもち、融通のきかない従順な行動様式をとる教員タイプが俗に「師範タイプ」と呼ばれ、この体質が国家の要請を無批判に受け入れる結果になったと指摘するとともに、これがどのようなプロセスを経て形成されてきたのかはまだ不鮮明であると論じている〔明石1981: 459〕。教師の歴史的研究を推進した唐沢富太郎（1911-2004）は、着実・真面目・親切などの長所の反面、偽善的で卑屈、かつ融通がきかぬ性格を師範タイプとみ、森有禮が文部大臣として師範教育を軍隊化してより、師範教育が形式に囚われた窮屈なものになったことをもって、師範タイプ形成の原因であるとしたのは〔唐沢1955: 55〕、明石が依拠した先行研究を代表するものであろう。これらより早く東京高等師範学校史の著者が、兵式訓練の余弊としての硬化と束縛がいわゆる師範型の弊の一因であると指摘し〔東京文科大学1931a: 140〕、師範タイプの形成について唐沢と同趣の見解を披瀝している。文部省の審議会での意見は何れも師範タイプを非難し、それを育成した師範教育を批判しているが、攻撃的は本科第1部およびその卒業者であって、第2部は「囚ハレザル師範教育ノ端緒」ともなるべきものと称揚され、第2部のみを教員養成の本体とすべしとの主張が強化される根拠となったのである〔国立教育研究所1974: 621〕。

よしんば従順、国家の要請への無批判の追従は教員の一般的性格（いわゆる体質）として肯うとしても、識者・研究者が声を合わせて卑屈、偏屈、因循姑息、偽善的、面従腹背、型にはまった融通性の欠如を指摘するのは、世評に追随するものではないだろうか。これらは教員といわず多くの職域で見られる個人的性格であるのに、教員についてはこれらが一般的性格としてとくに言及されるのは、児童を導くべき教員に対する期待水準が高いため、上記の点で問題となる教員がいれば、それをもって教員一般の欠点とする世評が成立したということも、なしとしないのではなかろうか。

師範学校では軍隊式の規律の保持、訓練が行われたことは上記のように事実であり、それが「鑄型教育」として性格形成期の少年に大きな影響を与えたことは否定できないが、論者の説くような否定的にしか捉えられないタイプを生んだのであろうか。もしそうなら、本家本元の陸軍士官学校や海軍兵学校卒業生こそ、指摘されるタイプの典型的な保持者ではない

だろうか。しかし、事実は誰の目にも明らかなように逆であったのは何故か。その理由の第一は、陸士・海兵の生徒にとって厳格な規律の保持またその訓練の必要性が明白で、彼らは戦いに勝つために不可欠の訓練としてこれに主体的に参加することができたからである。他方、若少の師範学校生徒には厳格すぎる規律訓練の必要性が理解されるはずはなく、そのため軍隊式の規律訓練はややもすれば古兵の新兵いびりのような効果を伴った。理由の第二は、陸士・海兵の卒業生には初級将校から上級将校への昇進が約束されており、將軍・提督となって国軍を率いる将来のみか、総長・長官さらに大臣・宰相まで登りつめうる将来が開かれていたからである。しかるに、師範学校第1部生徒には上級学校へ進学するにさえきびしい障碍があった上に、適性いかんにかかわらず県下の初等教育に職務義務年限制で縛り付けられていた点で、土地に緊縛された封建農民に類似している。師範タイプのマイナス面を指弾する者は、理由不可解な過度に厳格な規律保持と訓練を課した慣行、そして有為な若者から彼らが将来もちうる夢を奪った制度の罪を問うた後、複眼的にこの問題を論じるべきであろう。

IV 高等師範学校の同級生

1. 東京高等師範学校

東京高等師範学校は1872年学制頒布に先だち小学校教師教導場として東京御茶ノ水の旧昌平校構内文部省跡に官設され、師範学校と称したのがその淵源である。翌年、大阪および仙台にも大学区の官立師範学校が開設されたので、東京師範学校と改称した。全国に小学校の設立が進み、その課程修了者のために中学校が続々と開設される気運に応じて、東京師範学校は小学校教員の養成に加えて中学校教員をも養成する任務を負うこととなり、1875年新たに中学師範科を設置した。さらに1886年発布の師範学校令は、師範学校の目的を教員養成と定めるとともに、各府県所在の師範学校を尋常師範、東京師範学校を高等師範とし、尋常師範は小学校教員の養成、高等師範は尋常師範の校長および教員、ならびに各種の学校長および教員を養成する機関と法定した。これにより、東京師範学校は高等師範学校と改称するとともに、中等学校の教員のみを養成する機関となった。この年校則が改正されて、生徒は府県立尋常師範学校卒業生のなかから試験により採用することとなり、尋常師範と高等師範との間の教員派遣・生徒採用の相互関係が確立したが、1894年尋常中学校卒業生も入学試験に応募できるよう校則が改正されたのは、資本主義の発展に伴う職員・技術者の需要増に対応して中等学校がふえ、中等学校教員の供給増のための生徒増の必要に迫られたからである。このように、高等師範学校は広く全国中等教育界の中枢たるべき人材を養成する機関として発展し、かつて森有禮が本校監督（校長）たりしとき言ったという「教育の本山」[東京高等師範学校1911: 32]をもって自ら任じたが、1890年女子部を分離して女子高等師範学校が開校され、さらに1899年附属東京音楽学校を分離して東京音楽学校が別立されたので、女子

中等教員と音楽科教員の養成は高等師範学校の任務外となっていた。

1900年本校は、小石川大塚窪町なる旧守山藩邸跡25,000坪に地をトして校舎の建築に着手し、1902年3月末東京高等師範学校と改称した。改称は広島に第二高等師範学校が新設されたためであるが、東京側では旧昌平校跡からの移転により校地の面積が4倍近く拡大されて生徒増に対応したのと、あいまって高等師範学校教育の拡大を示している。拡大を必要とした事情は広島高師初代校長北条時敬の開校式式辞に明らかである。曰く、

(上略) 全国ノ師範学校中学校高等女学校ノ(男)教員ノ総数ハ、概ネ五千六百人、教員一人平均(中略)二十年勤続スルモノトセバ、年ニ二百八十人ノ補充ヲ要ス、然ルニ近時東京高等師範学校ニ於テ凡ソ百人ノ卒業生ヲ出ス、顧フニ是等ノ卒業生ノ数ハ、中等教員需要ノ半数ヲモ充タス能ハザルベシ、(中略)中等教育上教員ノ供給状態頗ル危険ニ堪ヘザル折柄、本校ノ設立ヲ見タル偶然ニアラザルヲ信ズ [広島高等師範学校1982: 16-17]

こうして設立された広島高等師範学校は、開校以来すべて東京高師の校則・諸規則を準用して運営されたが [同上: 15]、文部省令の高等師範学校規程が改正されれば、両校が改正の軌を一にすることはいうまでもない。1903年の規程改正により、本科が国語漢文部・英語部・地理歴史部・数物化学部・博物学部の5部に改編された。ついで1915年の規程改正によって、学科は文科・理科に2大別され、それぞれを3部に分けられたが、東京では文科第1部(修身教育歴史法制経済)、第2部(国語漢文)、第3部(英語)、理科第1部(数学)、第2部(物理学化学)、第3部(博物学と地理か農学)としたのに対し、広島では文科第1部(国語漢文)、第2部(英語)、第3部(歴史法制経済)、理科第1部(数学物理学)、第2部(物理学化学)、第3部(地理学博物学)という旧5部編成に近い形態とした。また、これらとは別に特科として、東京では従来の体操専修科を体育科と改称して特科に昇格させ、広島では教育科を新設した。このように、大枠では同じであるが、細部では異なった編成が発達していく。1926年の生徒募集に関する文部省令改正を機として、東京は独自に文科を4部に増やし、理科を3部に留め、外に体育科を置くという改正を実施した。それぞれの専門は文科第1部(修身教育法制経済)、第2部(国語漢文)、第3部(英語)、第4部(歴史地理)、理科第1部(数学)、第2部(物理学化学)、第3部(博物農業)である。東京は教員数も広島より多く(教授57, 助教授13, 助手3, 計73, 広島はそれぞれ51, 12, 2, 計65)、昭和期の東京高師の学科編成の骨格はここに定まったといえよう [東京文理科大学1931a, 広島高等師範学校1982: 23]。

以上のような充実発展の歳月をへる間に時代は大きく転変していた。第一次大戦後中等教育機関が急増して卒業者が激増したのに伴い、高等教育機関の増設が急務となって高等学校や各種専門学校ががつぎつぎと設立されたばかりでなく、1918年公布の大学令により、帝国大学のほかに官立・公立・私立の大学の設立が可能になった。この流れのなかで歴史のある専門学校が大学に昇格すると、遅れた官立専門学校の昇格運動が起こり、東京・広島両高師協

力して激しい昇格運動を展開した。1922年に至り教育評議会は文部大臣の諮問に対して「東京及び広島ニ文理科ヲ内容トスル単科大学ヲ設置スルコト」と答申し、1923年帝国議会で可決されたが、同年の関東大震災によって繰り延べとなり、漸く1929年4月文理科大学の創設が実現した。

昇格運動が最初目指したように高等師範学校が昇格して文理科大学となったのではなく、高等師範の専攻科（東京では1911年、広島では1918年設置、ともに修業年限2年）が文理科大学の組織に改められ、高等師範はその附属として存置するものとされたのである。高等師範自体が大学に昇格して、専攻科2年と本科4年の計6年が例えば本科3年・予科3年に再編成されたのではない。もしこのような編成になれば中等教員の供給に問題が生ずる恐れがあるばかりでなく、大学令第二条が規定する学部の種類のどれにも教員養成は当てはまらないという制度上の問題があり、さらに昇格運動が始まったときの校長嘉納治五郎(1860-1938)が教育至上主義の立場から大学令による昇格には反対であって〔東京文理科大学1955: 77-78〕、卒業生のなかにも高等師範の真骨頂は教員養成であるとの思いが、母校昇格の熱い念願の底に潜んでいた。こうした運動推進側と運動を受け止める側との主張や心情の妥協として、大学令第二条にいう文学部と理学部を統合し、ドイツ諸大学のPhilosophische Fakultätを範とした〔国立教育研究所1974: 794〕、文理科を内容とする単科大学を高等師範学校専攻科の改組によって設置し、師範学校令による高等師範学校はこれに付置するという教育評議会の答申が成立したのであろう。答申にいう「文理科大学に於テハ教育者タルニ必要ナル特殊ノ教育を施スコト」とは、高等師範学校の伝統を新設大学に投影したい念願に呼応するものであるが、必要によっては文科の学生に理科の専攻学科を、逆に理科の学生に文科の専攻学科を履修させやすい文理科単科の大学組織が、その達成を助けると期待された。また答申では「高等師範学校卒業生ニ高等学校卒業生ト同等ノ入学資格ヲ認ムルコト」〔東京文理科大学1931a: 92〕として、入学有資格者の第一に高等学校卒業生を掲げているのは大学令第九条に準拠したもので、東京文理科大学学則第18条では高等師範学校卒業生を有資格者の筆頭に挙げている〔東京文理科大学1931b: 29〕。

文理科大学の教員定員は教授36、助教授28、助手32、計96（広島はそれぞれ34、26、27、計87）、高等師範のそれは教授55、助教授13、助手3、計71（広島はそれぞれ49、8、2、計59）であった〔東京文理科大学1931b: 97、同1955: 98〕。東京・広島ともに高等師範の教授定員が1926年度よりもわずかに減じたが、高師よりも規模が大きい文理大の新設により全体として約2.3倍に膨張したこと、1割ていどの僅差であるが、定員数における東京の優位が保持されていることと、付置とはいえ高師の規模が大きいのが目に留まる。最後の点は職員数と学生生徒数を加えた全体を考慮すれば一層明白である。創立60年の1931年現在で、東京文理科大学教職員143、学生304に対し、東京高等師範学校教職員196（内兼任61）、生徒1048で

あった。括弧内の兼任とは、大学助教授が高師教授、大学助手が高師助教授兼任といった大学と高師の格差を歴然と示すもので、高師から文理大への兼任はなかった。

大学令による学術万能主義の文理科大学に師範学校令による教育至上主義の高等師範学校が付置されるという体制 [東京文理科大学1955: 78]、一つの学校経費で運営される学園のなかに、依拠する法令を異にし主義を異にする二つの学校が大学と専門学校、本体と付置という格差をもって併存する体制の内在的矛盾は、新設の大学に対して下位に貶められた高等師範が、創設以来半世紀余と広島の倍の長さの伝統を担う東京において、とりわけ根深かった。後年、母校出身者が教員の多数を占める高等師範と、帝国大学出身者が教員の相当部分を占める文理科大学とが東京教育大学に統合されるとき、激しく火を噴き上げる内紛の構造的な基盤はこの根深い内在的矛盾であった。

しかし、昇格当時はこれがとくに問題視されることはなかったようである。むしろ、その頃の高等師範の学風は悪い意味での師範タイプのコチコチの塊りのようなものになっていたが、昇格運動とその後の大きな流れには新しいもの、より大きいものを追求しようという精神が一貫しており、一種の学風改革であったと、当時の高師生徒で後に高師教授になった人物が回想している。この回想は、文理大新設を契機として、高等師範学校が旧態を打破しつつ新しく大きく育って行くことが期待されていたことを証するものであろう [同上: 92-93]。

私たちが入学した1943年度には、本科は文科5部、理科4部、体育科3部、そして芸能科という構成になっていた。1926年以降、部の新設、分離独立、昇格があった結果である。まず1940年に、中国語・中国時文、国語漢文を主要教科とする文科第5部が、主に中国大陸の日本人中等学校の教員を養成することを目的として創設された。いうまでもなく全国8県の師範学校に前年設置された大陸科に対応するものである。また、この年度から体育科が第1部(体操)、第2部(柔道)、第3部(剣道)に分けられて、文科・理科と並ぶ形となった。翌1941年には1906年以来の歴史をもつ図画手工専修科が芸能科と改称されて、本科に編入された [東京文理科大学1941: 19]。さらに1943年に理科第3部に包含されていた農学が分かれて理科第4部となった。東京帝国大学農学部附属教員養成所が独立して東京農業教育専門学校になった6年後のことである。ここに戦後にわたる東京高師本科の構成が定まった。他方、広島高師では理科第3部の主要科目に農学を加える(1939年)とか、中国語必修の文科第1部乙を設ける(1941年)とかの部分的な改正があったが [広島高等師範学校1982: 90]、東京高師の部・科の新設のような大きな改正はなく、大正初期の編成が大枠において維持された。

昭和戦前期の校舎等施設の立地状況を概観すれば、校地の南部に本館があり、その東北に東館、北に西館が並び、西北を運動場が占めていた。木造2階建ての本館には講堂と本部事務局がおさまり、日の字形の木造2階建ての東館は高等師範の校舎、鉄筋コンクリート地下1階地上3階建ての口の字形の西館は文理大の校舎で、それぞれ教室・教員室・研究室・実験

室などがあつた。西館の北に附属小学校の校舎（1935年新築）がつづき、その東に広がる起伏のある斜面は旧守山藩邸の時代から庭園として造成された占春園で、湧き水を湛えた落英池とプールが木立の間から見え隠れしていた。プールの北の平坦な地面にはテニスコート3面と大きな木造平屋の武道館（柔道場・剣道場）があり、飛び込み台つきのプールとあいまって、体育科および部活動の構内センターをなした（構外運動場は1936年近郊の保谷村に設置）。附属小学校の北には木造2階建ての寄宿舎（第1寮～第6寮）が棟を連ね、平屋の食堂と医局、そして談話室・娯楽室がある亦楽館も付設されていた。寄宿舎は校章に因んで桐花寮と呼ばれた。

明治初年の創立当初から、附属小学校と寄宿舎は「生徒をして他日人の師範たらしむるに適すべき訓練を加える」に必要不可欠の機関と目されたが〔東京高等師範学校1911: 9〕、1886年の師範学校令発布の前後から兵式体操そして兵式教練が正課に加えられ、修学旅行には兵式の行軍を行い、さらに寄宿舎での寝食・座臥・室内の整理など兵営を範とするようになった〔同上: 37-39〕。寄宿舎の兵営的組織は厳格に過ぎるため漸次緩和され、1895年の学生寮仮規則を契機として自由闊達の新風を取り入れたものの、朝夕の人員点検、室内の整頓灑掃、外出規定などは旧のように行われた〔同上: 52〕。

その後の大きな改正は、市内のあちこちに分散していた寄宿舎が1924年すべて大塚の地に統合されたことと、大正デモクラシーの風潮を受けかつ大正後期の昇格運動を担った生徒の志気が結集して、寄宿舎自治が実現したことである。生徒指導に責任をもつ生徒主事・生徒主事補（1928年設置）は、寄宿舎生活の監督・指揮者ではなく、とくに若い生徒主事補は顧問格の先輩として寮生の前に立った。始め全校生徒の全寮制であったが、この頃には全寮制は原則として1年生だけとなり、3年生は幹事・寮長・室長など2年生は副室長などの役員に選ばれて、寄宿舎に留まる制度に改まった。

室長会議を規定して自治を保障した1931年改正の寄宿舎規則は、その第一条で「寄宿舎ハ生徒ヲシテ教育者タルノ人格ヲ修養シ理想的共同生活ヲ営マシメ卒業後ノ寄宿舎管理ノ能力ヲ体得セシムル」にありと目的を明示した〔東京文理科大学1931: 385〕。理想的共同生活の標語はしばらく措くとしても、教育者たるの人格修養と卒業後の寄宿舎管理能力の体得を謳っているのは、一般高専の寄宿舎にない特色というべきであろう。早くから生徒の親睦と修養のための団体として組織されていた校友会は、大学昇格運動に活躍し、文理大開設後は大塚学友会と改称して活動してきたが、1941年に至って改組されて大塚学園報国会となった。そのさい、寄宿舎もこの組織の一環に組み入れられたが、従前の目的は継承された。ただ、部屋割りの久しい伝統であった旧大塚学友会各部の部室を全廃し、各室ごとに文・理・体・芸能各科の1年次生徒を組み合わせる構成に改めた〔東京文理科大学・東京高等師範学校1941: 156〕。この改革によって部活動の実施に不便が生じたが、同学年生徒間の科や部を

超えた同期としての交流・友情が育まれたことは軽視できない。

寮生の主な居住区は第2寮から第6寮までで、各室は板張りの学習室と畳敷きの寝室に分かれていて、室長以下7名ほどで1室を構成した。1年生だけの全寮制ということもあって、三重師範の寄宿舎で経験したような上級生によるしごきはなかった。季節によって若干変動はあったが、朝6時起床、清掃後朝礼、7時朝食、8時登校、正午昼食、午後5時夕食、7時から黙学、9時各室で室長指導のもと夕礼、10時消燈というのが基準であった。朝礼は附属小学校の運動場に全寮生が集したが、それは点呼ではなかった。暖かい季節になると、しばしば夕方占春園に集められて在寮上級生から校歌ならびに寮歌の指導を受けた。先輩が作った寮歌の数々や昇格運動のときに作られた宣揚歌を互いに肩組み輪になって歌い、時には乱舞しつつ寮歌を高唱して練り歩くこともあって、自ずから団結心や愛校心が培われたように思われる。

寮門の傍らに寮生各自の名札をかけるボードがあって、赤い字の氏名が表になるように裏返して外出するのであるが、寮担当の指導主事が生徒の外出行動を監視するためというより、寮生の所在を明らかにするという意味合いが濃かった。午後9時の門限で寮門が閉まってから門を乗り越えて入ったり、寮の境をなす壁を乗り越えて近道で帰寮しても、とくに問題視されることはなかった。また、中学校からの新生は未成年のため禁煙であったが、喫煙を咎められることはなく、彼らと担任宅を訪問してビールをつがれて驚くということもあった。寄宿舎生活の規律はあったが、それは団体生活に必要な規律であって、師範学校の寮のように一定の型に無理矢理押し込むといった細部までの統制はなく、総じて生徒の人格を尊重する自由闊達な寮風を師範からの入学者に感じさせた。

戦時色が強まるなかで、学校も寄宿舎もその波を受けて変わったが、中枢からの衝撃波の到達は地方の師範学校より早かったのではないだろうか。修身を主要教科の第一位とする広島にない部が文科第1部とされ(1915年)、国民道德の教育を任としたことにそれが早くも端的に示されている。先にもふれたが、1941年4月従来の大塚学友会を解消して大塚学園報国会を結成し、さらに同年9月報国会の隊組織として東京文理科大学高等師範学校報国隊を編成したのは、三重県師範学校の場合と同じく文部省の訓令によるものである。同年1月の東条英機陸相が発した「戦陣訓」を受けてか、42年に東京文理科大学・東京高等師範学校は連名で「戦時学徒訓五ヶ条」を定めた。一、学業研鑽・教育報国、二、質実剛健・気節、三、規律節制・礼儀、四、感謝奉公・勤労、五、保健衛生・身体錬磨の五ヶ条であって、各条を懇切に解説した文章を付けて学生生徒に配布したが、印字がまずく所々判読しかねる粗悪な用紙の文書そのものが、物資欠乏の時代に入っていたことを物語っている。こういう時代環境・教育環境の東京高等師範学校に私たちは入学したのである。

2. 1943年入学の同級生

小学校と師範学校の同級生については、それぞれの卒業後の履歴を追う必要上、卒業年をもって表示したのに、高等師範学校の同級生に限って入学時をとったのは、一つは修業年限短縮という決戦下高等教育一般に課された非常措置と、もう一つには高師から文理大への接続という特殊事情とによって、高師2年修了、3年修了、4年卒業と3群に分かれたため、同級生をまとめて捉えるには入学年次によるほかないからである。

私は文科第1部に入学した。同級生には、倫理的なもの道德的なものへの関心からこの専攻を選んだ本格派ばかりでなく、文科の先頭の部だから文科を代表するものだろうと軽やかに選択した者もいる。私は歴史が好きで文科第4部を志望していた。第4部の主要教科である歴史の試験科目は国史・東洋史・西洋史と年毎に交替し、私の受験年には東洋史が第二次試験の科目になると予想されたので、有巖教授『概観東洋通史』（1937）をテキストとして徹底的に準備した。しかし、発表された試験要項によれば東洋史でなく国史が試験科目となっていたため、国史を勉強し直さねばならぬこととなった。そのことは已むをえないとしても、第4部のもう一つの主要教科である地理の教科書に失望した。というのは、田中啓爾教授（1885-1975）の『師範新日本地理』（1938）について勉強したのだが、諸国物産表のような内容で、なぜその県ではかの産物が代表的な産業になったのか、その「なぜ」を教えてくれないからである。地理に失望した私は歴史の試験科目の予想が外れたことを契機に、受験対象を変えることにした。もし受験に失敗して、現場の新米教員勤務の傍らの再挑戦では、合格はおぼつかないから、ぜひとも一発で合格しなければならぬ。そのためには新たに勉強する受験科目が1科目でも少ない専攻がよい、という受験対策的な考量から第1部を選んだ。

文科第1部の同級生は26人という少数であった。そのこともあって、まず1943年に東京高師に入学した同期生全体について、広島高師と比較できるところは比較しながら、大要を述べることにしたい。先にふれたように、高師入学資格は始め師範学校卒業者に認められ、ついで中学校卒業者にも認められたが、この外に相当の資格のある者が補欠入学を許される規程であったから、第一に入学者を師範卒、中学卒、その他（実業学校）に分けて観察すること、府県の師範学校では入学者は主に特定府県出身者に限定されたのに対し、高師入学者は全国から集まったから、第二にその地理的分布を観察すること、予めこの二つを点検する。

1943年入学の同期生は403人、同年の広島高師の入学者は257人、東京はその1.6倍となる。ただし、広島は文科と理科だけなので、東京から体育科・芸能科を除いて文科・理科だけにすれば311人、広島の1.2倍に止まる〔広島高等師範学校1982: 60〕。東京高師創立70年に当たる1941年の全校生徒数は、文科500人、理科417人、体育科358人、芸能科42人、計1,396人であった〔東京文理科大学・東京高等師範学校1941: 付表〕。1943年入学者数の科別内訳は、文科148人、

理科163人, 体育科76人, 芸能科16人, 計403人である。これを1941年の数値の1/4と比べると, 理科の増員と体育科の減員が目につく。理科教員の増員は戦時下の国家的要請であった。体育科入学者が減ったのは, 1941年設立の東京体育専門学校(体操科・武道科, 入学者計100人)が体育科志望者のかなりの部分を吸収したためであろう。

同期生403人のうち7人は休学のため連絡がつかず上記の属性2点すら不詳ゆえ, 以下不詳を除いた396人を対象としよう。まず, 経歴別構成比をみると, 全体では師範卒47%, 中学卒52%, その他2%で, 僅差をもって中学卒のほうが高い。全国師範学校卒業生総数, 全国中学校卒業生総数を名目母集団とよび, 名目母集団に対する比を求めると, 師範卒のほうが圧倒的に高いことであろう。適当な比較資料がないので, 1927~31年の東京高師の入学者1,168人を引用すると, 1943年の経歴別構成比とは趣を異にし, 師範卒26%, 中学卒72%と中学卒が圧倒的に高い。当時は昭和恐慌の時代で中学校卒業生の教員志望者が多く, 入学志願者を有効母集団とよぶなら, 有効母集団中中学卒は実に78%を占め, 師範卒は17%に留まった。こういう背景のもとで中学卒の入学者構成比が高かったのである。1943年の入学志願者数は今のところ不詳である。

なお, 1943年に師範学校が昇格して専門学校になったため, 1944年の東京高師入学者551人中師範卒は僅か3%に転落し, 他方, 師範学校から直接文理科大学に進学できるようになって, 1944年10月の東京文理大入学者148人中師範卒は3%と低い数値ながら学制改革への速やかな反応が認められるのである。図らずも私たちの期は, 師範卒が高師入学者の半数近くを占め, 師範-高師-文理大のコースがまだ安定していた最終局面, 換言すれば教員養成の階段的過程における高等師範の地位急落の前夜を経験していたのである。

さて, 上記のような経歴別構成比を科別にみると, 芸能科だけ師範卒のほうが高率(60%)である。師範学校では図画工作の科目が手抜きなく教授されるため技能が磨かれ, 志望者も多くなったからであろうか。文科の総数では師範卒51%, 中学卒47%とほぼ半々であるが, 実際に半々なのは第4部だけで, あとは専攻により区々である。すなわち, 師範卒が多数を占めるのは文科第1部85%, 第5部56%で, 中学卒が多数を占めるのは第3部68%, 第2部62%である。英語を主要教科とする第3部に中学卒が多いのは, 師範学校における英語教育の劣弱さを想えば当然のことであり, 国語漢文を主要教科とする第2部に中学卒が多いのも, 国漢が主要受験準備科目であったことから理解できるだろう。他方, 第5部に師範卒がやや多いのは, 大陸向けの教員養成を目的とする第5部が, いくつかの点で中学卒より師範卒にとりつきやすかったからではないだろうか。そういうなかでの第1部の師範卒85%というのは突出している。入学試験に第一次と第二次があり, 第一次の英数国漢の共通学力試験に合格した者が第二次の志望部別の主要教科についての試験を受けたのであるが, 第1部の第二次試験の科目である修身は, 一般中学生の受験準備科目のなかになく, 他方, 師範

学校では修身を重視したことによるのであろう。ともあれ、生徒の経歴別構成において師範卒が突出して高い部とは知らず、修身公民を主要教科とする文科第1部に、私は高師の文科に一発で入学する捷徑とみて受験したのである。

先に引用した1927～31年には、試験倍率は15倍という高さであったが、1930年代の後半から低下し、私が受験したときには数倍であった。正確なところは入学志願者数が不詳であるため確かめようがないが、1943年の広島の倍率は3倍であったから〔広島高等師範学校1982:60〕、東京もだいたいそんな程度だったのではないだろうか。

さて、1943年入学者の出身地分布であるが、大局的に観察するため全国を東日本（関東以北、北海道・樺太を含む）中央日本（甲信越から近畿まで）西日本（中国以西、沖縄・台湾・朝鮮を含む）の三つに分けると、それぞれ191人（48%）132人（33%）73人（18%）となり、中央から東に重心があることが判明する。これは西日本を中心に広島高師が入学者を集めるからである。この点を確かめるために、広島高師第一回入学者である1902年予科入学者102人の出身地分布をみると、東日本18人（18%）中央日本42人（41%）西日本42人（41%）となり、予想を裏切らない。比較のために東京高師の1902～11年予科入学者1,186人の分布をみれば、東日本347人（29%）中央日本516人（44%）西日本323人（27%）となっており、東京高師は中央日本から東、広島高師は中央日本から西という入学者の地理的重心の分化が、両高師並立早々から現れていることが判明する。広島は文科・理科だけだから、1943年の東京高師入学者のうち文科・理科の合計を抜きだすと、東日本154人（50%）中央日本110人（36%）西日本44人（14%）となり、両高師間の重心の分化がさらに歴然とする。なお、東京高師だけの学科で広島と競合しない体育科・芸能科の1943年入学者合計は、東日本37人（42%）中央日本22人（25%）西日本29人（33%）と全国的に分布している（表3）。三重県師範学校から高師文科へ進学した私たち3人のうち2人は東京、1人は広島と分かれたことも、小さい数ではあるが、両高師の関係を反映するものといえるかもしれない。

さて、文科第1部26人の入学時年齢は、これまで同級生について経験したこともない分散を示していた。中学新卒なら1925年度生まれ、師範新卒なら1923年度生まれ、という分散は制度的なものであるが、中学卒4人のうち2人だけ1925年生まれで、あと2人は1922～21年生まれ（罹病、就業のため）、師範卒22人のうち12人は1923年生まれで、あと10人は1916～22年生まれであった。後者はおおむね小学校で訓導として勤務した経験を持ち、最年長は勤務歴7年という。現場経験の外、師範卒業直後に受験勉強のため専攻科に学んだ者や、教歴を中断して専攻科に入った者など、経歴は師範学校の同級生にはみられぬ多彩ぶりを示した。師範卒の比率が高いことは、入学時の年齢分布が広いことだけでなく、経歴が多彩であることを随伴したようである。

出身地は東日本15人（58%）中央日本5人（19%）西日本6人（23%）と、広い範囲にはば

表3 両高師の比較と東京高等師範学校本科1943年入学者の地理的分布

| | 東京高師1902～ 1911年予科入学者 | 広島高師 1902年予科入学者 | 東京高師本科 1943年入学者 | 左のうち 体育科・芸能科 |
|-------|-------------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|
| 東日本 | 347 [^] (29%) | 18 [^] (18%) | 191 [^] (49%) | 37 [^] (42%) |
| 中央日本* | 516 (44) | 42 (41) | 132 (33) | 22 (25) |
| 西日本 | 323 (27) | 42 (41) | 73 (18) | 29 (33) |
| 計 | 1,186 (100) | 102 (100) | 396 (100) | 88 (100) |

※ 甲信越から近畿まで。

資料：東京文理科大学1931a, 広島高等師範学校1982, 東京高師18年会1996。

らつきながらも東日本に重心がある。それは、同じ師範学校出身が東日本に3組7人いるため、偶然というほかないだろう。東は北海道、西は山口・朝鮮から集まった、1922～23年生まれの師範卒が16人(62%)と大勢を制するものの、最年長と最年少との開きが9歳という年齢差のある、中卒・師範卒入り混じった26人のクラスが登場したのである。

文科第1部生徒として受けた1年次の科目は、修身、公民(法学)、心理、論理・哲学、歴史(国史・東洋史)、国語・漢文、生物、外国語(英語・独語)、体育、教練であり、外に人物錬成をめざす修練という軍国主義色濃厚な科目があった。授業時間数が多い修身という主要教科になじめたわけではないが、総じていくつも興味深い授業があり、学問の片鱗にふれる思いがしたのは幸いであった。漢文担当の鎌田正教授(1911-2008)が応召されるのを、教室で見送ったことなど記憶に生々しい。

高師は4年制で、1年次から4年次まで各学年にクラス担任の教授がつき、担任が級長を指名した。1年では修身担当の伊藤榮四郎教授(1910-85)、2年では教育学担当の山際眞衛教授(1896-1960)が担任であった。経過の詳細は省くが、私は伊藤先生の三顧の礼もだしがたく級長の任を引き受け、山際先生は1年次の例によって私を級長に指名された。文科第1部の級長は同学年文科全生徒の代表、かつ同学年文・理・体育・芸能科全生徒の代表という慣例であったため、常に同級生・同期生を指揮する立場に立たされたが、三重県師範学校で学友のU君から学んだ指揮法が随分役に立ったようで、「君は陸士へゆくべきだった」とからかう友人さえいたことは、後年の私から想像すらできないことであろう。

私たちのクラスには留学生が満洲から3人と中華民国から1人来ていた。元来の26人と合わせて30人が授業では行動を共にしたが、留学生は学校構内の寄宿舎でなく飯田橋界限の留日学生会館などに宿泊していた。私は混成のクラス内の交流を促進するため、入学後間もなく各人に自己紹介的な数行の短文を書いてもらい(中国留学生顧傳澎君のみ未提出)B4版3枚のガリ版刷りにして配ったり、近頃考えていることをエッセイ風にまとめて提出してもらい、数人づつ綴じて回覧に付したりした。私の手もとに偶然残った第3輯には「古典と日

本精神」「自己反省」「凡兇断想」などと題する文章がある。また、その年の夏休みを利用して三重・奈良・京都3府県下の歴史遺跡巡歴のクラス旅行を試み、担任の伊藤先生と先輩の文理大学生も1人加わってくださった。静岡県以東と中国以西出身で26人中23人を占め、巡歴地に近い者が3人しかいないクラスであったから、上記3府県への旅行は学びつつ親睦を深める効果があったようである。2年生になった春には、神奈川県江ノ島に赴いてクラス会を催した。このようなクラス活動を私は級長の責任として積極的に推進した。後年私が大学の学部長を勤めたとき、「学部教授団の級長」を範型としたのは、小学校から連続して13年間も級長の任にあった後遺症かもしれない。

寄宿舎で入ったのは第2寮第8室、2階西端の部屋で、室長は理科第3部、副室長は理科第1部、室員は理科第1部、同第3部各1人、体育科第2部2人と文科第1部の私という7人構成で、しかも体育科の2人は同じ岩手県出身であったから、各科各部混合といっても、できるだけ混合させることを意図したわけではなく、むしろ2人ぐらいは同じ部の生徒を組み合わせる部分的混合が舎務部の先生方の方針であったのかもしれない。正副室長は権力を振るうわけではなく、兄貴役というか、むしろ世話役であった。

寄宿舎から約5分、ダラダラ坂を上り占春橋を渡って校舎に入る。教室や運動場では主に授業をめぐって同級生との絶えざる交流があり、僅かな時間で寄宿舎に帰れば、他部の多彩な同期生との共同生活が待っているという、刺激に富んだ日々が展開した。寄宿舎では新入生歓迎会や春秋の寮対抗運動会など定例の年中行事のほか、応召あるいは予備学生志願寮生の壮行式、靖国神社駆足参拝など切迫した戦況を反映する行事がくり返された。学業生活も時代の大波をかぶって勤労奉仕などで中断される。5月に3日間高師1年生と文理大1年生のそれぞれ全員が赤羽被服廠へ、10月には1週間文科第1部と第2部の1年生が江東区の日立製作所へ出勤した。また、6月には全校生徒に対する教練の査閲があり、9月には6日間1年生全員が習志野練兵場での野外演習に参加した。さらに、1941年9月編成の東京文理科大学東京高等師範学校報国隊の下部組織である学内防衛隊の防空演習もくりかえし行われた。入学した1943年10月学徒の徴兵猶予が停止され、師範卒1年生の大部分が徴兵の対象となったが、教員養成諸学校の学徒は理工科学徒と同列に入営延期が認められたので、同期生で年齢超過のため召集されたのは、1年次には1人に止まった。

2年生になると、大多数は寄宿舎を出て下宿生活を始めた。私は、寮生の必要により医療品を調達したり業者経営の売店を監督したりする厚生部の委員となって残留した。委員長は理科第3部の3年生、委員は文科・理科・体育科の2年生各1人、それに助手のような形で文科・理科の1年生各1人、計6人で、部室は文化部と同じく第1寮にあった。部にはもう一つ、食堂を管理する食堂部があり、文化部と食堂部も厚生部同様、委員長・委員という構成で部室をなしたのであろう。こうして、1年生時とは趣の異なる寄宿舎生活を経験するこ

となる。所定の任務をもつ部室であったことから室員の志向がまとまりやすく、1年次の第2寮第8室時代よりも親密な学友関係が培われ始めたように思われた。

しかし、1944年6月のマリアナ沖海戦を境として戦局が不利に傾く直前に、学徒の勤労働員は通年となり、部ごとに動員先の施設に宿泊したため、寄宿舎生活はその年の6月頃から急速に解体していった。文科第1部についていえば、6月下旬の10日間、2年生と1年生が東京都北多摩郡村山村（現・武蔵村山市）に赴き農家に分宿して農作業に従事し、帰校するや直ちに文科第1部2年生と3年生、東京臨時教員養成所（1940年東京文理大に付置）の博物科2年生、計70人ほどの生徒が軍需会社日本鋼板工業の尾久工場へ通年出動となり、浅草中見世の日本鋼板第7光繁寮に入寮した。

2年担任の山際教授、3年担任の大杉謹一教授（修身）、臨教2年担任の印東弘玄教授（植物）が交替で工場もしくは寮に来られたが、授業はまったくなく、授業に工場での作業がとって代わった。寮での部屋割りも工場での作業も3グループ別々であったが、全体を代表する必要があるときには、第1部3年の級長がその任に当たったことはいうまでもない。そんな体制の寮で演芸会を開いたとき、第1部2年生は劇団「桐の葉」を組んで出演し、全員投票の結果1等を獲得して記念撮影までしたことがある。

私は工場からの要請に応じて数人の学友とともに電気溶接の技術を習得し、爆弾の円筒状外枠を製作する鋼板溶接を担当して、依頼によっては夜勤もこなした。他方、2年生全員で鋼板裁断の機械仕事をしたり、リアカーで運搬作業をするなど、工場の都合により作業に変更があった。私は大型の用具や機械を使って特定の作業を遂行するのに必要な最少の人数を策定し、その最少の人数に作業させる一方、過剰な人員は休憩させて、用具・機械は休みなく働かせながら、学徒側の作業時間を短縮させることに努めた。そうしないと、続けさまに作業する実は不本意な少数と、その周りでブラブラするだけの不完全燃焼で実は不満多数とに分化して、志気が低下し作業能率も落ちる。そこで全員をいくつかの班に分け、作業のつぎは休憩、休憩のつぎは作業というふうに、各人に作業と休憩の時間を循環させてみな平等に参加できる作業管理の方法を案出したのである。こうした私のリーダーシップが顕著だったのか、1944年10月制定の「学徒勤労表彰規定」により表彰されるよう山際先生が推薦状を書いてくださった。首都圏の表彰式は1945年2月11日（紀元節）に文部省で行われるとの通知を受けたが、空襲警報のため取りやめとなり、後日届いた出席者名簿によると、報国隊・教職員・学徒の3類があって、私は学徒16人の1人として表彰されたことを知った。

東京の江東地区は1944年末以来度重なる空襲を受けて焼け跡が拡がり、1945年3月には浅草寺界限のみ焼け残っている有様だったから、空襲があってもここは残るのではないかと楽観していたが、3月9日の夜の空襲でみな焼かれ、会社の光繁寮も焼失した。私は浅草寺病院危うしとの報知を受けて数人の学友と救援に駆け付け、屋根に登って消火に努めていたと

ころ、光繁寮も危ないとの急報により、黒煙を吹き上げる浅草寺本堂を右手に、2階3階にチョコチョコと火が這う五重塔を左手に見ながら、火がついた仁王門をくぐって帰寮した。寮友はすでに持てる限りの荷物を背負い両手に提げて集まっており、印東教授と3年級長の指揮のもとに撤収が始まった。二列縦隊で雷門の角を左に曲り、吾妻橋を渡りきった地点で、私は本隊を見失った。最後尾で暫く頭を下げている間に本隊が墨田川の左岸に降りていったのである。頭を上げて左右を見回したときには、雪崩のような避難の群衆のなかに独り取り残されていた。幸い本隊は墨田河畔で火災に悩まされながら全員無事、浅草寺病院にとり残されたH君たちも恙なく、私も避難の群衆のなかで一夜を過ごしたが、翌朝生徒主事補で厚生部担当の大森晃先生（1912-97）の寓居に転がり込み、無傷で帰校することができた。しかし、こうして光繁寮の共同生活に幕が下り、尾久工場での作業も流れ解散的に終わりを告げたのである。

通年の勤労働員で学業を放棄させられたため同級生共通の目標がかすんでしまい、同じ工場でも働いても作業では同級生を結ぶ絆にならず、かえって仲間意識に亀裂を生むこととなった。動員現場での労働を甘受した者と、甘受できない者との亀裂である。これまでの記述で判明するように私は甘受し、働く以上はむしろ積極的に働こうとしたが、国家存亡の非常な危機における已むをえない要請として甘受したのであって、学業の場を奪われた痛みという共通項を媒介に、甘受できない者と深いところでは通底する悲痛な思いがあったはずである。しかしそこに気づいて手を差しのべないかぎり、両者の間に不協和音がきしみ出することは避けられない。私のような姿勢を1年次の担任伊藤先生は心から支持し、かつての担任教授と生徒代表の関係から2年次にはまるで同志のような関係になっていた。先生のほうがそういう態度で私に接してくださったのである。また、師範出身の年齢の高い同級生は私の熱心な支持者であった。こうして、クラスの仲間意識に微妙な亀裂が走って、友情は濃淡の差をもちながらもクラス内に広く拡がるということなく、絆を異にするブロックに色分けされた。それは、三重県師範学校5年間に培われた幅の広い友情とは質を異にするように思われる。人格形成期の真っ直中で芽生えた友情と形成後に育った友情とに違いのあることを無視するものではないが、若者の生きた時代環境が相互の位置関係を介して友情の形成に影を落とすことに注目したいのである。

浅草で被災して1週間もたたない15、16の両日、陸軍特別甲種幹部候補生採用検査があり、世田谷区の東京第二陸軍病院で準備検査を、四谷第五国民学校で身体検査と口頭試問を受けた。前年設置の特甲幹と略称されるこの制度は陸軍初級将校の短期養成コースであって、私は合格して5月に神奈川県相模原の陸軍通信学校へ入校するよう命じられた。それからほどなく、21日付けの東京文理科大学入学許可の通知を受けとった。この年、高等学校専門学校の修業年限が2年半から2年に短縮され、高師2年で受験できることとなったので、かねて

出願してあったのである。筆記試験はもとより口頭試問すらなく、書類選考だけで、同級生のうち7人が文理科大学の教育学科か哲学科への進学を許された。私は伊藤先生の跡を慕う思いで哲学科倫理学専攻を第一志望とし、志望どおり認められた。

このように1945年3月は転換の時であったが、もう1件新たな展開が加わる。実は2月8日付け陸軍省令第6号をもって、教員養成系学徒の入営延期制度が文系については4月1日で廃止となっていたのである。かくて、文理大入学の日と通知されたまさに4月1日付けで、「現役兵ニ徴集シ左ノ通入営ヲ命ズ」との召集令状が郷里の生家に届き、4月16日石川県金沢市の東海第五十三部隊（工兵）へ入隊することとなった。帰郷のため東京駅を発つとき、同級のOさんが「森岡くーん」と叫びながら発車間際の車窓に駆けつけ、餞別を私の手に握らせて見送ってくれた。忘れ得ぬ思い出の一つである。こうして帰郷後入営となるのだが、3月末をもって東京高師の課程は修了したので、私自身のことはここまでとしたい。

私たちは1945年4月段階ではみなまだ学生あるいは生徒であったが、短期現役制度で第二国民兵役に編入されていた師範卒4人と、中退・死亡する者3人を除く19人は、前記の入営延期制度の廃止により、召集されてつぎつぎに入営した。みな内地勤務であったから戦死を免れ、敗戦後間もなく復員して、それぞれほぼ順調に卒業できた。ただし、北海道が本籍の1人だけは、樺太でソ連軍と戦って負傷し、シベリアに抑留されて復員が遅れたために、高師卒業がもっとも遅れ、大学進学の夢も放棄せざるをえなかった。なお、1945年5月25日の夜間空襲によって、本館・東館・武道場・寄宿舎など大塚窪町の木造建築物は悉く灰燼に帰し、復員して帰校したときにはコンクリート造りの西館だけが焼け跡に建っていた。

前記の中退1人と在学中死亡2人、計3人を除いた同級生23人のその後の進路について、まず進学・卒業の年次をみれば、文理大進学1945年（高師2修）7人、46年（高師3修）11人、47年1人（高師卒）、計19人、その卒業は1948年5人、49年12人、50年1人、53年1人であった。進学しなかった4人の高師卒は1947年3人、49年1人である。同じく1943年に高師文1に入学したのに、敗戦を挟むその後2～3年の間に起きた罹病、経済事情、シベリア抑留などによって、卒業年次は1947年から53年まで五回に分かれた。なお、文理大卒19人の専攻は、教育学科教育学7人、心理学2人、哲学科哲学4人、倫理学6人と4専攻に分かれている。

1943年に東京高師に入学した同期生たちが、1964年に至って同期会「東京高師昭和十八年会」を結成し、連年総会を開催して親睦を新たにしていたが、同級生・同期生袂を分かった1945年から50年をへた1995年に、『星霜五十年』と題する記念誌を編むことを企画して、翌年刊行にこぎ着けた。同期入学約400人のうち約300人が会員として登録されていたが、その約6割の180人を越える同期生が寄稿して卒業後の経歴の概要を報告しているので、この文集の記事によって文科第1部の同級生が辿った履歴を概観してみよう。

文科第1部の23人は、卒業のさい中学校高等女学校国民科修身（1950年1月中学校高等学

校国民科修身と書き換え)の教員免許状を文部省から受けて、後先しつつもみな教職に就いたが、そのうち4人は早く退職して他に転じた。裁判所判事1人(高師のみ)、教団職員1人、銀行員1人(高師のみ)、自営業経営1人の計4人である。残りの19人は教育界に生涯を埋めた。しかしその経歴は多様であった。一貫して中学校1人(高師のみ)、中学校から都教委をへて中学校1人、中学校から文部省をへて大学1人、一貫して高校3人、高校から文部省2人、高校から都道県教委をへて高校4人(うち高師のみ1人)、高校から大学1人、大学から文部省1人、一貫して大学5人であるが、一貫して中学高校の最終段階(ただし夭折を除く)、および現場から都道県教委をへて現場という経歴の最後の現場は校長職である。このように中学教育と大学教育に広く渡っているが、高校教員が10人と多く、ついで7人が大学教授を経験している。また、現場の経験をへて文部省の視学官・社会教育官・教科調査官になった者4人、都道県の教委で管理主事・指導主事・教育研究所長を勤めた者4人を数える。大学教授を経験した7人の専門分野は、教育学2人、西洋教育史1人、教育政策史2人、社会科教育学1人、文化心理学1人、社会学1人で、文理大の教育学・心理学・倫理学各専攻の出身である。勤務先は国立大学4人、私学2人、国立一私学1人と国立大学が多いが、母校の後身東京教育大学で終始したのは唯の1人であった。一貫して大学の5人はみな博士号を取得している。

上記の23人について住所の地理的分布が半世紀の間にどのように変化したかをみると、1943年には東日本14人、中央日本5人、西日本4人と東日本に重心があることはすでに述べたが、1995年には東日本21人、中央日本2人、西日本0となって、東日本への集中が顕著である。中央日本2人も山梨と新潟であるから、いかに東日本への集中が激しかったかが判る。東日本のうち東京とその周辺3県を首都圏と捉えるなら、首都圏は1943年には7人(30%)であったのが1995年には16人(70%)となっている(表4)。東日本への集中とは首都圏への集中に外ならず、前記の教職経歴はこのような首都圏への地理的集中を伴いながら実現し

表4 東京高師文科第1部1943年入学者(死亡・中退3人を除く)の住所の推移

| | 1943年 (入学時) | 1995年 (『星霜五十年』) | 1948年・1995年 同一県居住(生存者) |
|----------------------|-----------------|--------------------|---------------------------|
| 東日本 | 14 [^] | 21 [^] | 5 [^] |
| (うち首都圏) [*] | 7 | 16 [†] | 3 |
| 中央日本 | 5 | 2 | 1 |
| 西日本 | 4 | | |
| 計 | 23 | 23 [†] | 6 |

※ 東京・神奈川・千葉・埼玉。† 死亡者遺族4件を含む。
資料：東京高師18年会1996

たのであった。なお、首都圏集中の傾向はどの科・部でもみられるが、文科においてとくに著しく、1995年段階の不詳を除いた1～5部の計119人については、18%から61%へととなる。

定年退職後、大学教授たりし者は私大に再就職し、現場の校長たりし者は私立高校長に招かれた外、私大教授、学習参考書出版社の顧問などに転進し、高裁判事たりし者は公証人として、それぞれ準現役の活動を営みつつ古稀を越えた。現在はおおむね退隠生活に入っており、23人中死亡者はすでに11人、90歳を過ぎて私立中高一貫校の校長職に就いた者は例外というべきであろう。

1964年の発会以来活動を続けた東京高師昭和十八年会も、会員の持病・老衰・死亡により総会の出席者が年々減少したので2005年一旦解散し、同期生全員会員制から有志会員制に切り替えて53人の会員で再出発した。しかし、世話役の幹事があいついで死亡したり介護のため外出の自由を失ったりで、事務局が半身不随となったため、2010年をもって解散することとなり、1943年入学の同期生集団も最終的な解体の日を迎える。私は母校に勤務しその廃学を見届けた者として、創設以来この会に中核会員として関わりつづけたが、いよいよ母校の集団的記憶とも訣別することとなったのである。

V 総括

かつての学友との接触がegoの社会的活動の幅を上げ、また人間性の幅を広げる可能性について、本稿の冒頭で言及したが、こうしたことは初等普通教育の段階の学友では起こらず、中等普通教育でも教員養成校のような卒業後の活動が限定されているところでは生起しがたい。渋沢の場合のように、主に高等普通教育の場において生ずるのではないだろうか。隅谷三喜男の自伝的著述からもそのことを窺うことができる [隅谷 2003]。そこで、匆々の間にまとめた本稿では、この点の考察に立ち入ることを控えたい。

最後に、小学校・師範学校・高等師範の同級生の平均的ライフコースの断面を比較して総括に代えたい。数量的な処理をしていないため、比較的多くの者が辿った経歴をかりに平均的とみなし、比較は生活空間と職業的地位について行う。そのうえで、三つのライフコースを繋ぐべく「転機」turning pointsについて考察し、最後に教員養成学校に学んだことの後半生への影響に言及する。

生活空間は三つの層をなしている。第一は日常空間、日常生活の必要上行動する空間であって、ほとんど毎日、少なくともきわめて頻繁に回遊する範囲である。第二は活動空間、職業あるいは生計のためにきわめて頻繁に、少なくとも頻繁に出歩く範囲である。第三は、訪問空間、親戚・知友・展示館・催し会場・レクリエーション施設などを訪問する範囲であって、そのための外出は時々か稀にである。第一はもっとも狭く、第二、第三とついで広いが、後二者はしばしば分岐あるいは交錯しながら、第一の外に広がっている。生活空間と一口に

いってもこのような重層構造をもつと考えたい。生活空間は成長とともに拡がり、加齢によってピークを迎えた後縮小するが、この拡大と縮小は第二と第三について顕著である。ここでは、職業的地位との関連から第二の活動空間に注目する。

職業的地位とは職種を指すに留め、職業の階層的地位は問わない。そのことは階層的地位が問うに値しないことを含意するものではない。職種にかかわらず、己が職業をとおして社会に貢献してきた同級生たちの経歴を辿ると、それらの職種の階層的地位の議論は階層研究の専門家にお任せしておきたい気持ちになる。それほど階層的地位の高くない職種の人で高い社会貢献の志をもって精励した事例を見聞し、政治の世界でよくあるという逆の事例を考慮すると、集合的ライフコースの手法による自伝の試みでは、階層的地位の高低に関連する議論を避けたいのである。

1. 生活空間の拡大

阿波小学校の同級生の活動空間は、在村の者にとってはほぼ地区、ついで阿波村内に凝集するが、町村合併、自家用車と電話の普及、それらに支えられた経済活動圏の拡大によって、阿波村外へ厚薄の差を伴いつつ拡がったように観察される。しかし、在村するかぎり活動空間の中核は依然として地区とってよからう。高卒後3ヵ月ほど上野の算盤塾で訓練を受けた後、村役場に就職し、町村合併後の大山田村役場で頭角を表して、最後には村の助役になった者の場合、活動空間は大山田村外にも拡がったと考えられるが、例外であることは言をまたない。他方、小学校卒での離村者は、それぞれ定着した都市部の窪みで広からざる活動空間を構成し、進学を契機とするごく少数の最終的離村者は職種に応じた広い活動空間のなかに生きた。

三重県師範学校の同級生の活動空間は、居住する地区、そして町村を核としつつも、教員として在職中勤務した小中学校の分布範囲に拡がっている。したがって、教員異動の現行制度下では、地方教育事務所的人事異動範囲ということになる。授与された教員免許状は県下全域に通用するが、特定の地方教育事務所管内を超えて県下広域を活動空間とした者は少ない。甲組級長を歴任したU君は、三重県が国体開催県となったときには県国体局競技課の中核となって活躍した後、県教委体育保健課長を勤め、県立高校長に栄転して退職したが、これなど活動空間が全县に及んだ例外中の例外というべきであろう。

東京高等師範学校の同級生の活動空間は、高校教員となった者の場合、現場では東京都内の相当に広い範囲に、都道県教委に入った者は職掌別に都道県の全域に、文部省に入った者はこれまた職掌別に全国に及んだ。大学教員になった者の場合、おおむね1, 2の大学を拠点としつつ広範な教育活動を行うとともに、学会活動では全国的な拡がりをみせた。また、裁判官、宗教団体職員の場合、活動空間はいくつかの都道県にわたり、それぞれの領域では全国的な関連のなかで生きた。

以上のような学校のランクによる同級生の平均的な活動空間の広狭を誇張していえば、局地的、地方的、全国的となる。師範学校を卒業することによって、活動空間は局地的なものから地方的なものに拡大し、さらに高等師範を卒業することによって、地方的なものから全国的なものに広がったのである。

2. 職業的地位の移動

職業的地位についてはそれぞれの箇所述べ、上でも関説したので、要約に留める。阿波小学校の同級生で進学しなかった人たちのうち在村の者は第二種兼業農家であり、離村者は各種の小規模な自営業主となったようである。進学離村者は官署・学校・団体に勤務し、専門的職業ないしホワイトカラーに類別される職種に就いた。

師範学校の同級生のうち進学しなかった大多数は、小中学校教員として職業生活を終えた。大多数は校長まで勤めたが、長期療養を余儀なくされ、教頭で早期退職した者も稀にいる。進学した4人は1人を除き大学教授になった。もともと農村出身が多かったため、県下で引退生活に入った人の多くは、農村生活あるいは農村と関連のあるに生活に帰った。

高等師範学校の同級生は高校教員が多く、文部省の上級専門職員となった者以外は、校長として教員生活の掉尾を飾った。つぎに多いのは大学教授である。三重県師範学校の私の同級で広島高師文科第2部（英語）に進学したI氏の同級生は、本人が病気で休学したため詳細は不詳であるが、東京の文科第1部と似たものであったようである。同じく三重県師範学校の同級で東京農業教育専門学校農学科に進学したOc氏の同級生30人のうち、21人は農業高校教員、大学教授は4人と、同様の傾向を示すが、高校教員が比較的多いうえに農業高校にほぼ限定され、大学教授のうち正式に大学教育を受けた人が1人だけというのは、農教が高師と違って大学に接続していなかったためであろう。これから見ると、東京高師の有効同級生23人のうち19人まで文理大に進んだことを想起して、活動空間の広がりや職業的地位の種類は高師卒の結果というより高師－文理大卒の結果であったことを認めなければならない。本稿では高師卒で捉えるほかなかったが、卒業後の活動に文理大卒の効果が含まれていることを看過してはならないだろう。高師の同級生は、首都圏に集中したこともあって、1/3を占めた農村出身の者も、農村的生活からほぼ完全に離れた引退生活に入ったことを付言しておきたい。

以上のように、小学校だけの人たちは農家か小規模な自営業主、師範まで進んだ人たちは小中学校教員、高師まで進んだ人たちは高校教員・文部事務官・大学教授になった。このことが活動空間の局地的・地方的・全国的という拡大と表裏している。

3. 人生の転機

上記の観察によって、小学校から師範学校に進み、さらに高等師範学校に進学したことは、活動空間の拡大と職種の移動をもたらしたことが検証された。したがって進学は人生の転機

だったと想定されるが、果たしてそうだったのか。この点を検討するために、どの段階の同級生にも人生において何が転機だったかを訊ねてみた。

進学しなかった小学校同級生では、兄が戦死したため兄嫁と結婚して家を継いだとか、婿養子に貰われたとか、妻の実家の婿が大工だったため、彼から大工の技術を伝授してもらい、兼業農家から大工を本業にするようになったとか、家族歴関連の出来事が転機になっているが、そうでなければ、とくに転機はなく、予想したような世間普通の人生を送ったということであった。進学者では、他出後帰村した者にとって進学は転機でなくても、帰村しなかった者には多かれ少なかれ転機を形成している。

師範学校の同級生では、師範進学がかなり受動的であったためか、進学は期待され予想されたことの始まりというだけで、とくに転機というほどのことでない、とする者が存外に多い。しかし、師範から上級学校に進学した者にとっては、師範進学がなければつぎの段階の進学はありえなかったのであるから、間違いなく転機を構成した。もちろん、転機としての意義の大きさは人により異なることであろう。

高師進学は、三重師範から広島高師に進んだI氏にとって、また東京高師に進んだ私にとっても決定的な転機であった。しかし、高師の同級生には、高師進学よりも、例えば結婚によって遊びの生活から真面目に努力する生活に転換したと結婚を挙げる者や、勤務校の校長の言動に感銘をうけて教員を生涯の職とする決心がついたと尊敬する上司との出会いを挙げる者など、卒業後の出来事を指摘する者がいた。東京近県に生まれ、中学を出て東京の師範第2部に入り、専攻科で受験準備をした人や、東京隣県に生まれて中学に進み、専門学校に進学した兄がいる人にとって、高師進学は緩い坂道を登るようなものであったと推察されるが、遠隔県の師範第1部卒の者にとっては高師進学は高く聳える壁への挑戦であったから、高師入学は彼らにおいて転機をなしたと考えてよいのではないだろうか。面談において、転機をもう少し説的形容節づきで質問したなら、想定のような結果をえたのかもしれない。

上記のように、遠隔県の師範学校第1部出身者にとって、東京高師進学は転機であり、これを可能にしたという意味で師範進学も転機といわねばならない。しかし、この二つの転機には看過できない相違があるのである。この点を確認しうる情報は面接調査では収集するに至らなかったため、私の見解を述べることをお許しいただきたい。

師範の同級生には農村出身、農家出身が多かったが、進学は農業から脱出する方便であったとしても、出身地から脱出する方便とまではいえないようである。とくに長男の場合、勤め上げた後むしろ帰村して家を守ることが期待された。他方、高師進学は初等教育界からの脱出であり、初等教育の管理官庁は都道府県であったから、初等教育からの脱出は出身都道府県からの離脱と連結する契機を内蔵していた。ただし、1995年に生存していた文科第1部の同級生19人中実に6人が1943年入学時と同じ都道県にいる(表4)。卒業後、家や就職の

事情で出身都道府県に帰って教職等に就いた者が3割(同期生全体では約5割)に上ることは、高師進学が出身府県からの離脱と直結したとは必ずしも言えないことを証するものである。先に説いたように、大勢は首都圏集中であるが、これに次いで出身府県への帰還が注目される。しかし、非進学者のほぼ全員が出身府県の教職に就いた師範卒の場合とは明らかな対比を示し、高師進学が出身府県から離脱する契機を内蔵していたことは否定できない。

離脱の契機を含む進学には制度的な壁が立ちはだかっていた。これに挑戦するには当事者の志が不可欠である。そのような志をどのようにしてもつに至り、その志を実現するに必要な学力をどのように取得したのか、その概要はすでに述べたところである。私の場合、小学校から高師-文理大卒までを通観し、後の人生に及ぼした影響を考量すると、最大の山場、転機は高師進学であったとの思いを禁じえない。しかし、三重師範の同級で東京農業教育専門学校に進学したOc氏においては、文理大への直結といった便宜がなかったため、ふたたび志を立てて京都帝国大学農学部に進学したことが次の転機をなし、さらに傍系出ながら京都大学農学部助教授に抜擢されて学究としての地位を確立したことが、最大の転機として同氏の念慮に刻みつけられている。したがって、転機とはきわめて主体的な体験事であって、高い壁に挑戦し、困難を排してそれを乗り越えた結果、新たな展開の扉が開いたことが、転機として記憶されるといわなければならない。私の場合も高師進学後さまざまな転機があったが、とくに挑戦の努力をしたことはなく、恩師先輩のお引き立てで転機をへてきたので、客観的には大きな転機というべきことも、主観的には小さな転機でしかなかったのかもしれない。

4. 教員養成学校に学んだことの刻印

15年戦争期に教員養成学校に学んだことがその後の人生にどのような刻印を残したか。最大の刻印はほとんどが中学であれ高校であれ大学であれ教員として生涯を送ったことであるが、軍国主義的超国家主義的色彩を帯びた戦時下の教員養成学校の刻印として特筆できることは何か。熱い皇室尊崇の念でも、旺盛な愛国心でも、また強い集団主義的志向でもないことは確かであろう。Oc氏は「われわれはenjoyする、愉しむ、ということを知らない」と告げてくれたが、存外そのような日常的な態度のなかに影響が深く刻まれているのかもしれない。

いずれにせよ、それは私たち自身のことであるため、かえって捉えにくいと思われる。むしろ、他者の目が参考になる。旧制中学-旧制高校-帝大の本流を歩んだ人たち、さらには各種実業系の学校卒業者たちが、教員養成学校の卒業者をどう品評しているか。受けた教育の系統別比較の視点からの究明が効果的ではないだろうか。「師範タイプ」の問題とかかわる肝心の点に辿り着きながら、先に反論的言説を吐露しただけで、準備不足のため、さらに深く切りこめずに筆を擱くことを遺憾とするものである。

文 献

- 明石要一「昭和期師範生の生活史」石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教員社会史研究』亜紀書房、1981、459-505.
- 青井和夫「人生行路と人間の成熟－ブラス（Plath, D.W.）の場合」森岡清美・青井和夫編『ライフコースと世代－現代家族論再考－』垣内出版、1985、97-128.
- 太田啓之、2003「東大卒業10年調査」*Aera*, 5月19日号、10-15.
- 広島高等師範学校創立八十周年記念事業会編・発行『追懐』1982. (非売品)
- 唐沢富太郎『教師の歴史』創文社、1955.
- 故本間末五郎先生お別れの会編・発行『本間先生の略歴』2003. (非売品)
- 国立教育研究所編・発行『日本近代教育百年史』第5巻、1974.
- 駒場四一回編・発行『駒場 青春の歷程』1993. (非売品)
- 三重大学教育学部同窓会百周年記念事業会編・発行『創立百年史』1977. (非売品)
- 三重県編・発行『三重県史 別編 統計』1989.
- 三重県阿山郡阿波尋常高等小学校編・発行『生徒手簿』1929. (非売品)
- 三重県師範学校編・発行『昭和十三年七月一日現在 職員生徒名簿』1938. (非売品)
- 三重県師範学校編・発行『昭和十七年六月末現在 職員生徒名簿』1942. (非売品)
- 三重師範学校昭和十八年卒業生いちはつ会編・発行『いちはつ』第2号、1964. (非売品)
- 三重師範学校昭和十八年卒業生いちはつ会編・発行『鎮魂録－戦死・物故の友人を偲んで』1993. (非売品)
- 三重師範卒業三十周年記念事業会編・発行『ねんりん』1974. (非売品)
- 宮本常一『渋沢敬三』（著作集50）、未来社、2008.
- 森岡清美「ライフコースの視点から」稲垣忠彦ほか編『教師のライフコース』東京大学出版会、1988、304-314.
- 落合明教授定年退官記念事業会編・発行『落合明教授定年退官記念誌』1987. (非売品)
- 大山田村立阿波小学校編・発行『卒業生名簿－1958－』1958. (非売品)
- 大山田村立東小学校編・発行『同窓会名簿－1978－』1978. (非売品)
- 大山田村立東小学校編・発行『同窓会名簿－1989－』1989. (非売品)
- 齊藤弘編『私の年譜』1988. (非売品)
- 『師範教育を想う』特別委員会編『師範教育を想う』撫子会、1997.
- 隅谷三喜男『隅谷三喜男著作集』第9巻（「激動の時代を生きて」）、岩波書店、2003.
- 高野邦夫『新版天皇制国家の教育論－教学刷新評議会の研究』芙蓉書房出版、2006.
- 谷口康平『歌集 耕庭集』短歌新聞社、2003.
- 東京文科大学編・発行『創立六十年』1931a. (非売品)
- 東京文科大学編・発行『東京文科大学・東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覽 昭和六年度』1931b. (非売品)
- 東京文科大学・東京高等師範学校編『創立七十年』培風館、1941. (非売品)
- 東京文科大学編・発行『東京文科大学・東京高等師範学校執務例規』1943. (非売品)
- 東京文科大学編・発行『東京文科大学閉学記念誌』1955. (非売品)
- 東京高師昭和十八年会編・発行『星霜五十年』1996. (非売品)
- 東京高等師範学校編・発行『東京高等師範学校沿革略史』1911. (非売品)
- 東京教育大学編・発行『東京文科大学学位録』1962. (非売品)

【付記】

本稿の資料収集のために、静永俊雄・恵村孝一・滝本一之・宮崎勉・岩森ふみ・森岡きよの諸氏（阿波小学校関係）、落合明・大橋勇・中村鐵郎・森崇・宇田操・奥田先・山路完爾・森鯛介の諸氏（三重県師範学校関係）、岡本武男・桑原知幸・鈴木庸の諸氏（東京高等師範学校関係）、成城大学図書館・お茶の水女子大学図書館に種々お世話になった。録して深謝の意を表し、関係各位のご健康を祈念するものである。

An Attempt of Writing an Autobiography with the Idea of Collective Life Course

MORIOKA, Kiyomi

“Collective life course” is the life courses of a group of persons who shared a series of meaningful experiences and therefore kept close contacts mutually over a certain period of time. I am interested in the influences of the common experiences and mutual contacts on their career formation and personality traits. Among a variety of examples of collective life course, I select school class mates for description and analysis, and try to edit my own autobiography in terms of collective life course of my class mates.

As a young boy, I attended a primary school situated in an isolated rural community in Mie Prefecture for eight years. Then, I studied at Mie Normal School located in Tsu City, prefectural capital of Mie, for five years to become a primary school teacher. Followingly, I went on to Tokyo Higher Normal School to become a teacher of middle schools and learned there for two years.

My career as a student covered 15 years from 1930 to 1945 which coincided exactly with the period of Japanese military expansion and final defeat. What impacts have the age of successive wars and the character of normal school education placed on my career and personality? In the present paper, I attempt to ask this question by referring to instances of my class mates of three stages, namely, primary school, normal school and higher normal school. In the last chapter, I discuss the expansion of activity space, the shift of occupational positions, turning points of life, and impacts of school character, by a comparison of the three groups of my class mates in successive stages of education.